毛沢東思想は
百戦百勝の武器

北京外文出版社

毛沢東思想は
百戦百勝の武器

外文出版社
北京

出版者のことば

中国にはいま、労働者、農民、兵士大衆がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を掌握する新しい時代があらわれています。本書に収められた四編の文章は、中国人民解放軍による毛沢東思想の活学活用のすぐれた文章です。

目次

毛沢東思想は百戦百勝の武器
……中国人民解放軍海軍某部隊「海上猛虎艇」党支部……1

毛沢東思想がわたしに無限の知恵と勇気をあたえてくれた
……中国人民解放軍空軍某部隊「航空兵英雄中隊」中隊長　董小海……21

唯物弁証法を用いて、戦士の思想転化の工作をおこなう
……中国人民解放軍紅色第九中隊指導員　陳金元……47

毛沢東思想で魂を改造する
……中国人民解放軍某部隊副指導員　王道明……69

毛沢東思想は百戦百勝の武器

中国人民解放軍海軍某部隊「海上猛虎艇」党支部

一九五八年に、わたしたちの艇は僚艇と協力して、アメリカ製の蔣介石の軍艦「沱江号」を撃沈しました。また、一九六五年の崇武海戦でも、わたしたちは僚艇と協力して、蔣介石一味のアメリカ製のフリゲート艦「永昌号」を撃沈し、「永泰号」を撃破しました。

わたしたちの小型砲艇は、なにによって、敵の大型軍艦をやっつけたのでしょうか。ほかでもなく、毛沢東思想にたより、毛沢東思想で武装した人びとの革命的精神にたよったのです。

軍艦の技術的性能は数字ではかることができるが、
毛沢東思想で武装した人びとの威力ははかることができない

海戦になれば、軍艦が大きくて、はやくて、火力の強い方が、戦闘力が大きいから、勝つこ

とができる、と一部のものは考えています。けれど、この考え方が誤りであることは、わたしたちの実践が証明しています。海軍の技術的条件がどんなに複雑で、装備がどんなに近代化されていても、戦闘力というものは人と物との統一体であって、そのうえ、人の要素がいつでも決定的な要素なのです。海上作戦では、人びとは艦艇にたよって敵をうち破りますが、その艦艇は人によってにぎられ、動かされなければならないのです。艦艇は死物ですが、人間は生き物です。どんなにりっぱな艦艇でも、もし自覚に欠けた者がにぎるなら、その威力を十分に発揮することはできません。軍艦の技術的威力には限度がありますし、数字ではかることのできるものですが、毛沢東思想で武装した人びとの生み出す強大な力は、はかることのできないものです。このような力があれば、十の威力しかもたない武器でも、数十、さらには数百の役割をも果たすことができます。また、このような力があれば、なにものをも圧倒することができ、奇跡をつくりだすことができ、どのような強敵にもうち勝つことができるのです。

一九六五年の崇武海戦では、敵は技術装備の優勢をたのんで、はじめからわたしたちに集中砲火を浴びせてきました。海上にせん光がかがやき、砲弾が頭上でうなりをあげました。けれど、わたしたちの戦士は、そんなことにはびくともしないで、猛攻撃をくわえながら突進し

て、敵艦の目の前に迫ると、ねらいをさだめて、敵が頭もあげられないほどの猛烈な砲火を浴びせました。崇武海戦が終わったあとで、ひとりの捕虜が、わが艇の甲板にすえつけられた砲や、山のような薬きょうをつくづくと見まわしたり、艇内をきょろきょろとながめたりしながら、恐怖、驚異、疑惑の色をうかべていましたが、それは、艇内にまだなにか「新兵器」がありはしないかと疑っているみたいでした。そこで、わが水兵が「われわれにはもっともすばらしい兵器がある。それは銃でも砲でもない。だが、銃砲、飛行機、戦車、原子爆弾よりずっと大きな威力をもっている。それは、毛沢東思想で武装した人びとであり、人びとの階級的自覚であり、人びとの勇敢な精神だ」と教えてやりました。

敵を憎み、人民を愛し、「私」をすてて「公」をうち立て、
革命闘争に身をささげる決意をしっかりと固める

戦士の自覚と勇敢な精神はどこからくるのだろうか。生まれつきのものだろうか。そうではない。それは、偉大な毛沢東思想のはぐくみのたまものです。革命闘争の実践が教えているように、階級と階級闘争がわからなければ、革命はわかりません。階級闘争の観点をもたないお

ろか者は、真の知恵と勇敢さをもつことはできません。わたしたちは、毛主席の階級と階級闘争についての論述を実践と結びつけて学び運用することを、思想建設の基礎課程としています し、それをくりかえし学び、くりかえし運用しています。そして、帝国主義と搾取階級にたいする幹部と戦士の憎しみをいっそう深め、その革命闘争に身をささげる決意をしっかりと固めさせています。

わたしたちの艇の戦士の多くは、貧農・下層中農の子弟で、旧社会では搾取階級と反動派の抑圧をうけてきました。かれらは毛主席の著作の学習をつうじて、自分たちの悲惨な生い立ちと、幾百万幾千万の勤労人民がうけてきた階級的苦しみとを結びつけています。そして、これこそが、人類の徹底的な解放のために勇敢に身をささげる革命的精神を生みだしているのです。戦争をすれば犠牲がでるものです。けれど、革命のために死ぬことは、死に場所をえることですし、その死は泰山よりも重いことを、戦士たちは知っています。かれらは、「生と死は対立したものであり、また、統一したものでもある。死がなければ生はない。先輩たちが革命のために身を犠牲にしなかったならば、今日の全国人民の幸福な生活はなく、将来の子々孫々の幸福もない」といっています。わたしたちは不必要な犠牲をはらえといっているのではありま

ません。けれど、祖国の人民が必要とするならば、すこしもためらうこともなく自分の生命をささげなければならないのです。

毛主席はこうのべています。「**世界観が変わるということは根本的な転換である。**」（『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』）そして、共産主義の世界観を確立する過程は、「私」をすてて「公」をうち立てる闘争のくりかえしの過程でもあります。わたしたちの艇は長年にわたって、つぎのような伝統をもっています。新しく入隊した同志が艦艇に乗りこんでくると、まず、銃や砲ではなく、毛主席の「老三篇」――『人民に奉仕する』、『ベチューンを記念する』、『愚公、山を移す』の三つの論文を手渡します。そしてまず、「艦艇の性能」ではなく、『人民に奉仕する』を教えます。戦士たちは、平時には、自覚的に「老三篇」を武器として、ブルジョア思想をほろぼし、プロレタリア思想をおこす闘争をくりひろげるように要求され、戦時には、「老三篇」の思想を自覚的に身につけて勇敢に戦うよう要求されています。多くの事実が雄弁に物語っているように、私有観念をもっとも徹底的にすて去り、公有観念をもっともしっかりとうち立てた人は、もっとも勇敢で、もっとも聡明な人になることができますし、もっとも完全に、もっとも徹底して人民に奉仕することができるのです。

勇敢さは、無私の精神から生まれ、偉大な毛沢東思想から生まれてくるものです。革命戦士は、革命のために生き、革命のために死ぬという世界観を確立してはじめて、戦いのなかで、もっとも自覚的に、敵を消滅することを第一に、自己を保存することを第二におくことができるのですし、また、敵を大量に消滅しないかぎり、もっとも効果的に自己を保存することができないし、犠牲をおそれない精神がないかぎり、犠牲を少なくすることができない、ということをほんとうに理解することができるのです。わたしたちが勇敢になればなるほど、ますます沈着、機敏になり、ますますたくみに、みごとに戦えるようになるのです。またわたしたちが勇敢になればなるほど、敵はますますふるえあがり、その技術もますます役に立たなくなるのです。そしてまた、わたしたちが勇敢になればなるほど、敵を消滅するのがますますはやくなり、自己を保存することもますます可能になるのです。崇武海戦で敵に接近したとき、敵は集中砲火でわたしたちをはばもうとして、死にもの狂いで撃ちまくってきました。このとき、わたしたちの僚艇の一隻が敵の砲火をたくみにさけながら、矢のような速さで敵艦の鼻さきに突っこんでいって、数発の砲弾を思いきり撃ちこみました。敵はたちまち混乱におちいって、その火力を押えつけられてしまいました。こうして、わたしたちはそれからの攻撃に有利な条件

をつくり出しました。そのうえわたしたちの僚艇は一人の死傷者も出さなかったのです。これは、勇敢に敵を消滅すれば効果的に自己を保存することができ、わたしたちの勇敢さがあれば敵の頑強さがなくなり、敵にたいしてふかい恨みをもち、なにものもおそれないわが戦士たちの痛撃には、どんなに頑強な敵でも抵抗することができないのだ、ということを力づよく説明しています。

毛主席の著作をもっともよく学んでいるものは、もっとも勇敢で、
もっとも筋金いりで、もっともゆたかな知恵をもっている

革命戦士が戦闘にのぞんで、死をおそれないのは、かれらがふだん、苦しみをおそれず、困難をおそれないことが集中的にあらわされたものです。ふだん、苦しみや重い仕事に耐えぬく勇気がなければ、戦闘のさい、先頭を切って敵陣に突っこんでいく勇気などわいてきはしないのです。

海軍の活動の場は、広びろとした海原で、階級敵と戦うほかに、たえず自然界の敵と戦っています。荒れ狂う風波をおかして航行するとき、船酔、おう吐でくるしむものも少なくありま

せん。けれど、吐きながらでも、操作はつづけなければなりません。冬になると、海上の風雨が、するどい切っ先のように顔をさします。夏は夏で、甲板は焼けつくように熱くなり、艇内もまた蒸しかえるような熱さになります。このような苦しい生活を前にして、わたしたちは、困難にであっても前進し、苦しいこの環境を革命的精神をきたえあげるための大きな教室にしなければならない、と戦士たちに教育しています。たくましい革命戦士は、困難や苦しみ、荒れ狂う風波のなかで鍛えられて成長しなければなりません。たとえば、通信兵倪永香は、いつも狭くるしい通信室で受発信の練習をしています。夏になると、通信室の温度は四十度を越すのですが、それでも、かれは練習をつづけています。ある同志が、ひと休みしてはどうか、涼しい場所で練習してはどうか、とすすめると、かれはあっさりとこう答えます。「ふだん、苦しみに耐えぬけないようでは、いざというときにがんばりがきかないからね」

わたしたちの幹部、戦士は、なぜ、苦しい困難な条件のもとでも、自覚的に鍛練をつづけられるのでしょうか。それは、同志たちに、毛主席の著作を学習して、真心から人民に奉仕するという思想的下地ができているからです。戦士たちはこういっています。「われわれは、中国の革命と世界の革命のために、苦しみに耐え、重任をになうのだ。われわれが、あらしのなか

で歩哨に立ち、パトロールをしているのは、大多数の人びとの幸福のためなのだ。過去、革命の先輩は苦しみに耐えぬいて、新しい中国をつくりあげた。今日、われわれが苦しみを耐えしのぶのは、共産主義の新しい世界をつくりあげるためなのだ」　信号兵楊瑞松は、毛主席の著作の学習ノートにつぎのような感想を書いています。「いく晩もつづけてパトロールし、一日に三時間しか睡眠をとっていない。だが、われわれが何時間かすくなく寝れば、祖国の幾千万の人びとがそれだけ多く寝られるのだ。たとえ徹夜がもっと多く続いても、ぼくは満足だ」

革命のためには、長い年月よろこんで苦しみに耐え、また革命が必要とするときには、勇敢に身を犠牲にする――これはけっして一時的な衝動でできるものではありません。事実が立証しているように、毛主席の著作をもっともよく学習している戦士こそ、私心雑念がもっとも少ない戦士こそ、困苦にみちた試練に耐えぬくことができるのですし、戦いにのぞんでもっとも勇敢になることができるのです。水兵楊進興は入隊いらい『人民に奉仕する』を三十何回も学習し、学習するたびに自覚を高めてきました。崇武海戦のとき、とどろきわたる砲声にかれの耳は張り裂けんばかりに痛み、無電用レシーバーは湿気で漏電したために、針でつきさされるように神経が痛めつけられましたが、かれはそのままおしとおして、通信の任務をりっぱに果

たしました。「小さなトラ」といわれていた葛毅も、毛主席の著作の学習によって筋金いりの戦士となったのです。かれは『人民に奉仕する』を学習したあとで、つぎのような誓いのことばを書きしるしています。「およそ人民に有利なことは、たとえ命を断たれようとも、ぼくはやってのける。およそ人民に不利なことは、たとえ首をはねられても、ぼくはやらない。戦闘中に、ぼくは負傷しても、腕一本、足一本あるかぎり、あくまで戦いつづける。戦闘に有利なことであれば、たとえ最後の血の一滴を流しつくしても、ぼくはそれをやりぬく」　このように、中国人民と世界人民のために勇敢に身をささげる高度の自覚をそなえた戦士は、もっとも勇敢で、もっとも筋金いりで、もっともゆたかな知恵をもっているのです。

勇敢にたたかう革命的精神が必要であるが、
巧妙にたたかう科学的態度も必要である

敵の大型軍艦にたいして、わたしたちはそれをべっ視し、撃沈する確信をもたなければならないばかりか、同時に、それを重視し、消滅できるという自信をもつようにならなければなりません。勇敢にたたかい、勇敢に勝利する革命的気概が必要ですが、巧妙にたたかい、巧妙に

勝利する科学的態度も必要です。

わたしたちの艇が敵の大型軍艦を撃沈する実戦の経験をもたなかったころ、小型艦艇が大型軍艦を攻撃できるかどうかについて、ちがった見方がありました。一部の新兵の同志は、小型艦艇が大型軍艦を攻撃することはひじょうにむずかしいと考えていました。けれど、一部の古参の同志は、敵の大型軍艦を攻撃することはそれほど骨の折れることではないと考えていました。こうした見方はどちらも一面的なところがあります。そこで全面的な見方をもつように戦士たちを導いていくために、わたしたちは毛主席の著作のなかからこの問題にたいする解答をみつけだすことにし、さらに「われわれの小型艦艇、小型艦砲で敵の軍艦を撃沈できるか」という題で、同志たちに困難な点を全部言わせ、見解を発表させて、具体的な分析をくわえながらはげしい討論をくりひろげました。

船体も小さければ艦砲の口径も小さいわたしたちの艇が、はたして敵艦を撃沈できるのでしょうか。毛主席は早くからわたしたちに、**「共産党の指導のもとでは、人間さえいれば、人間世界のどんな奇跡でもつくりだすことができる」**（『観念論的歴史観の破産』）と教えています。わたしたちは毛主席の教えをうけた革命戦士です。技術や装備が一時的に劣っていても、

毛沢東思想という神通力のある無敵の秘宝があるかぎり、わたしたちはかならず「人間世界の奇跡」をつくり出すことができるのです。

手本にするような前人の経験がないばあいには、どこからその方法をみつけだすのでしょうか。毛主席はわたしたちに、**人民大衆は限りない創造力をもっている**、と教えています。わたしたちが毛主席の指示にもとづいて行動しさえするなら、三人よれば文珠の知恵というように、方法がみつからないなどと心配することはありません。高い山にも道はついているし、深い川でも船でわたることができるように、方法というものはいつのばあいでも人びとがみつけだすものなのです。

討議の結論は、小型艦艇でも完全に大型軍艦をうち破ることができる、しかし、かならず革命的気概と科学的態度をもたなければならない、ということでした。同志たちはこう言っています。小型艦艇が大型軍艦を攻撃するにはいくらか困難があるけれども、毛主席が早くからわたしたちに教えているように、すべての事物で二重性をもっていないものはなく、困難というものも二重性をもっている。困難と困難でないことも相対的なもので、一定の条件のもとで互いに転化しうるものである。むずかしいということは、まだ、実践していなくて、事物の法則

性をまだ知っていないということです。実践をつうじて、その法則をつかむようになれば、むずかしくなくなってしまうのです。これに反して、もしも困難を絶対的で、変わらないもので、虎の尾をふむようなものであると考えて、これとたたかう勇気をなくすならば、いつになっても事物の法則を知ることも、つかむこともできなくて、「困難」はいつまでも困難ですし、もともとむずかしくないものまでもむずかしくなってしまうのです。

同志たちはこういう思想に導かれて、敵艦のそれぞれの部位にこまかい分析と検討をくわえましたが、敵艦は鋼板でつくられているけれど、完全無欠で突くべきすきもないようなものではないことを発見しました。毛主席は、すべての事物はみな互いに連係し、互いに制約するものであると教えています。敵艦の各部位も同じで、攻撃しにくい部位と攻撃しやすい部位とは互いに連係しているのです。もしわたしたちがその強い所をさけて、弱い所を突くなら、かれらのもともと弱い所はいっそう弱くなるし、攻撃しにくいところも容易に攻撃できるようになるのです。敵の大型砲艦「沱江号」との戦闘で、わたしたちは敵の弱点にメスを入れ、強者が弱者に転化せざるをえないような方法を使って、まず敵艦の司令塔、砲座、甲板上の敵兵など船倉の上部にある目標を徹底的に破壊し、これを消滅しました。こうして、敵の砲火はたちま

ち「おし」になり、防弾鋼板も「豆腐の虎」になってしまい、この大型砲艦もまもなく撃沈されてしまいました。

敵が火力の優勢で戦うなら、わたしたちは政治的な優勢で戦う

これまで、一部のものは艦砲の口径、数量、艦艇のトン数などを戦闘力のすべてとみなして、こうした条件をそなえているものが優勢を占めることができる、と考えていました。これは形而上学的な観点です。こういう人には、敵の大きな軍艦、大勢の人員だけが目に映って、人心が一致していないこと、兵士に闘志がないこと、人員が多ければ多いほど混乱することなどという面が見えないし、また敵艦のトン数が大きいことだけが目に映って、味方の艇が小さくて喫水線が浅いために、機動力にとんでいるという面が見えないし、敵の艦砲の数や性能だけを考えて、その艦砲の威力を発揮させるには、どうしても人間の力にたよらなければならないという点を見のがしているのです。わたしたちの戦士がずばりといっているように、「赤い思想がなければ、照準を正しくあわせることはできない」のです。わたしたちは長期にわたる対敵作戦のなかで、艦艇の火力の強弱をはかる特殊な「公式」、すなわち、各艦砲の設計性能

の総和に、艦砲を使う人間の闘志を掛けるという公式を発見しました。だから、戦士の闘志が少し高まれば、艦艇の威力は数倍にもなるわけです。士気の高いことはわが軍だけのもっている絶対的な優勢であって、敵はけっして、この面でわたしたちとくらべることはできません。

海戦のときに、相手が火力の優勢で戦うなら、わたしたちは政治的な優勢で戦うという原則をつらぬき、勇敢で死をおそれないという特徴を発揮して、生にしがみつき死をおそれるという敵の短所を突くようにしてきました。わたしたちは、このように政治的な優勢を十二分に発揮できただけでなくて、兵器、装備上の味方の短所を長所に変えることもできましたし、またもともと低い敵の士気をいっそう低下させただけでなくて、兵器、装備上の敵の長所をも短所に変えることができました。

毛主席はこうのべています。「**事物の内部の矛盾する両側面は、一定の条件によって、それぞれ自己と反対の側面に転化していき、自己と対立する側面のおかれていた地位に転化していくのである。**」（『矛盾論』）一般的にいえば、敵艦は大きいので火力も強く、わたしたちの艇は小さいので火力も弱いのです。けれど、実戦のなかでは、こういう強弱は絶対的なものではなくて、一定の条件のもとでは互いに転化するものです。これらを転化させる決定的な条件は

人間の精神状態です。崇武海戦のとき、敵艦と遠くはなれていて、わたしたちの艦砲がまだそれほど敵に脅威を与えていないうちは、かれらの艦砲射撃はひじょうに規則的で、猛烈をきわめました。ところが、敵艦に近よって、わたしたちの艦砲がひとたび威力を発揮すると、かれらはすっかり乱れて、艦砲射撃もまったくでたらめになってしまいました。また別の海戦で、わたしたちは敵のある艦砲が空に向かってさかんに射撃しているのを発見しました。あとで、捕虜の話によると、この艦砲の照準手はだれよりも死をおそれ、頭を防弾用鋼板の上に出して目標をさだめる勇気がなく、撃ちながらだんだん首をちぢめるので、砲口がますます高くなっていったのだそうです。こんな人間がいくら最良の武器を手にしたところで、一体どんな役に立つでしょうか。

相手が技術装備にたよって遠距離で戦うなら、
わたしたちは勇敢さと機知にたよって近接戦をおこなう

実戦の鍛練をへるごとに、毛主席の人民戦争の思想にたいするわたしたちの体得はいよいよ深まってきました。わたしたちは、「**きみたちはきみたちのやり方で戦え、われわれはわれわれのやり方で戦う。勝てるなら戦い、勝てないなら去る**」(林彪同志の『人民戦争の勝利万歳』に引用されたことば)という原則を深く理解し、りっぱに貫き、活用すれば、必ず勝てることを身にしみて感じとっています。この四句のことばの核心の思想は、敵の長所をさけて、短所を突き、味方の優勢と長所を十二分に発揮するということです。海上作戦では、昼間の遠距離戦が長距離射程の兵器の優勢をもっとも発揮することができるので、敵は歓迎します。わが軍は自分の性質と特徴から、近接戦、夜戦を強調します。こうしなければ、わが軍の特徴と近距離射程の兵器の優勢を発揮できないのです。

わたしたちはこの問題についても、ひととおりの闘争をやってきました。一部のものは、海軍は近接戦や夜戦をやることはできないと考えていました。かれらは、「海上は一望千里で、利用できる地形がなく、かくれる地物もない。敵の艦砲は射程が大きく、火力が強いから、接近することができない」といいました。またあるものは外国の「経験」や規定まで持ちだしてきて、海上での近接戦、夜戦はひじょうに大きな危険をおかさなければならないし、先例がない、といいました。わたしたちはこの問題を解決するために毛主席の著作を学習しました。毛主席は、すべての真の知識は直接的経験をその源としている、とのべています。小型艦艇で

大型軍艦を攻撃することは、ブルジョア階級の軍事家や修正主義の軍事家にとっては、想像するだけでもおそろしいことなのです。このことについて、かれらは、どこかでいくらかでも経験をつんだことがあるでしょうか。かれらの規定にもとづいて戦うならば、もちろん、勝利はから談義にすぎなくなります。わたしたちは毛沢東思想にたより、大衆の知恵にたよって、自分の経験をつむよりほかに道はないのです。海上での近接戦、夜戦はもちろん危険をおかさなければなりませんが、戦士たちはつぎのように正しくいっています。革命をするからには、危険をおそれてはならないし、つまずくのをおそれて、歩くのをやめるわけにゆかないように、数発の砲弾をおそれて、敵の大型軍艦を発見したとき、すぐに「道を譲る」というわけにはゆかない。世界のすべてのことはみな人間がなしとげたのです。毛沢東思想の指導さえあれば、わたしたちは本のなかではさがせないものや世界でまだまとめられていない経験をつくり出すことができるのだ、と。

わたしたちは、毛主席の教えにもとづいて、敵味方双方の状況を具体的に分析したのち、海上でも完全に近接戦や夜戦をおこなえるということがはっきりしました。わたしたちはまず政治の面で、絶対的な優勢を占めていますし、士気が旺盛で、果敢でねばり強く、勇敢に戦い、

勇敢に突っこみ、中国革命と世界革命のために勇敢に献身するという自己犠牲の精神をもっています。これこそがもっとも根本的な条件です。つぎに、海上でかくれて、こっそり敵に接近したりすることはやさしくありませんが、味方の艇は小さくて、敵艦は大きいので、わたしたちの方がさきに敵を発見して、ふいに敵をめがけて勇敢に突進し、機先を制して、敵の遠距離射程の兵器に効果を発揮させないようにすることができます。そのうえ、夜のとばり、濃霧、岩礁、島などは、どれもわたしたちがかくれたり、待機できる海上の「自然のかくれ場所」ですから、意表をついて、敵前に立ちあらわれることができます。そのときは、敵は艦体が大きいうえに舷が高いので、遠距離射程の兵器で近い目標を攻撃することは、「水がめのなかでハンマーを振るう」ようなもので、力があってもそれを使いこなすことはできません。こうなると、敵のたよるべき火力の優勢がその反対側に転化してしまうのです。

実戦が証明しているように、近接戦、夜戦はわが軍特有の伝統的な戦法ですし、小型艦艇で大型軍艦を攻撃する基本的な戦法でもあります。崇武海戦のとき、わたしたちが「永昌号」に迫っていくと、敵はあわてふためきました。かれらの砲火はいっそう猛烈に火をはきましたが、あちらに一発、こちらに一発で全然目標に命中しませんでした。ところが、わたしたちが

砲撃をはじめるや、たちまち敵艦は砲弾を受けて人が死に、艦砲がひっくりかえってしまいました。こうして、近接戦、夜戦というのは、ちょうど孫悟空が鉄扇公主の腹の中にもぐりこんだようなもので①、敵がこちらを攻撃しようとしてもできないけれど、こちらが敵を殺そうと思えば、敵はもう生きのびることができないのだということを、わたしたちは深く体得することができたのです。

この数年、わたしたちの艇が船舶を護衛し、漁船を保護し、敵の破壊活動に反撃をくわえるなかでおさめた勝利は、どれも偉大な毛沢東思想の勝利ですし、毛主席の人民戦争の思想の勝利です。戦争という実践のなかから、わたしたちは、毛沢東思想はわたしたちの百戦百勝の武器ですし、この武器さえあれば、小型艦艇でも敵の大型軍艦をやっつけることができるし、また強そうに見えるどんな敵でも打ち負かすことができるのだということを、深く体得しました。

（一九六六年一月十四日づけ『人民日報』より）

① 孫悟空は十六世紀の中国の神話小説『西遊記』の主人公で、鉄扇公主はおそろしい妖怪のひとり。孫悟空は小さい虫に化けて、この鉄扇公主の腹の中にもぐりこみ、かの女を打ち負かした。

毛沢東思想がわたしに無限の知恵と勇気をあたえてくれた

中国人民解放軍空軍某部隊
「航空兵英雄中隊」中隊長　董小海

林彪同志はこういっています。「最大の戦闘力とは、毛沢東思想で武装した人であり、勇敢さであり、死をおそれないことである。」これまで、わたしはこの真理にたいする認識が足りませんでした。それで、わたしはこう思っていたのです。飛行機はひじょうに精密な近代兵器だから、技術がなければ飛べやしないし、まして戦闘なんかとんでもない。戦闘は主として技術でやるものなんだ、と。ところが、空中戦をやっているとき、よくつぎのような問題にぶつかりました。自分より技術のすぐれている敵と戦う勇気があるかどうか、自分より性能のすぐれている敵機と戦う勇気があるかどうか、敵機の方が多いとき、突っこんでいって戦う勇気があるかどうか、敵機に接近して戦う勇気があるかどうか、敵機がずるがしこい手を使って逃げ

るとき、それを追いまわす勇気があるかどうか、自分が受け身にたたされたとき、大胆に反撃にでる勇気があるかどうか。これらの問題に答えることのできるのは、勇敢さという言葉だけです。勇敢さに欠けているなら、たとえ、もっともすぐれた性能の飛行機をもち、もっともすぐれた技術を身につけていても、なんの役にも立たないのです。

勇敢さは技術と知恵を生む

「技術がすぐれていれば、肝っ玉も太くなる」というものがいますが、この言葉は正しくないと、わたしは思います。政治を突出していませんし、軍事一点ばりの観点を反映しています。なぜなら、「技術」の役割を強調しすぎて、思想という要素を軽視し、「技術」を第一において、思想を第二においているからです。

「技術」がすぐれているとか、おとっているとかということと、戦闘で「技術」を思うぞんぶん発揮できるかどうかということとは、別の問題なのです。「技術」がどのような人にぎられているのか、その人の精神状態はどうなのか、その人に勇敢な精神があるのかないのかを見なければなりません。わたしたちは人民の飛行士であって、党と人民にたいして無限の忠誠

心をもっていますし、世界のプロレタリア革命事業にたいして高度の責任感をもっています。わたしたちが「技術」をにぎれば、虎に翼が生えたようなもので、たとえ、わたしたちの「技術」が一時おとっていたとしても、最大の勇敢さにたよって、自分の技術を思うぞんぶん発揮し、敵を消滅することができるのです。わたしたちの中隊ができて間もなく、一部の同志が抗米援朝の戦争に参加しました。そのとき、かれらは戦闘機を二、三十時間操縦した経験しかなくて、技術は未熟なものでした。それにたいして、相手のアメリカの空中強盗はほとんどが第二次世界大戦に参加していて、飛行時間も一、二千時間を越えていました。ですから、「技術」についていえば、アメリカの空中強盗の方が「すぐれて」いましたが、かれらは肝っ玉が小さかったのです。わたしたちの方は、「技術」こそすぐれていませんでしたが、朝鮮とわが国の東北地方に野蛮な爆撃をくわえるアメリカの空中強盗の血なまぐさい犯罪行為にたいして限りない怒りに燃えていましたし、かれらを目のあたりにすると、怒りはいっそう燃えさかりました。そして、最初の空中戦のときには、敵機をみつけると、いきなり砲火をあびせて、一挙に三機を撃ち落としました。「技術がすぐれている」アメリカの空中強盗は鼠のように臆病で、技術を発揮するいとまもなく、わたしたちに打ち負かされてしまったのです。

わたしたちは勇敢な精神をもっているので、戦闘のとき、自信にみちあふれていますし、頭がはっきりしていますし、技術と知恵を十分に生かすことができます。敵機を撃ち落とす必要から、日ごろ使えなかった技術や戦法も使いこなすことができるのです。こういうことがありました。ある戦闘で、わたしたちの中隊の張以林が敵機を追撃していたとき、その敵機は一万メートルの高空から二、三百メートルの低空に降下して、海の方へ逃げようとしました。そのとき、いままで低空飛行をしたこともなければ、海上飛行をしたこともなかった張以林は、低空飛行を敢行して海面まで追撃しました。ふだん身につけていなかった技術を発揮したのです。追撃のあいだ中、飛行速度はこうした飛行の最大限度をこえていたので、機体はひどく傾斜しましたが、張以林は機転をはたらかせて安定させました。こうして、必勝不敗の英雄的な気概をもって、どこまでも追いつめ、とうとう敵機を海に撃墜したのです。かれのこうした技術と知恵は、プロレタリア階級の勇敢な精神があってはじめて発揮できたのではないでしょうか。

もちろん、わたしたちは技術の役割を否定はしません。わたしたちプロレタリア戦士は、高い階級的自覚と恐れを知らぬ勇敢な精神にくわえて、しっかりとした技術を身につければ、まさに翼の生えた虎のようなもので、戦場でひじょうに大きな威力を発揮することができるので

す。「技術」は戦闘力のなかの一つの要素であって、決定的な要素ではありません。「技術」は思想に支配されるものです。「技術」は勇敢さの基礎ではなくて、勇敢さの基礎は人のプロレタリア的自覚であり、無敵の毛沢東思想なのです。

勇敢さは受け身の立場を主動的な立場に転化させることができる

毛主席はこういっています。「**行動の自由は軍隊の生命であり、この自由をうしなえば、軍隊は敗北または消滅に近づくことになる。**」（『持久戦について』）空中戦は、敵味方の双方がたがいに主動権をうばいあって、受け身にならないようにするたたかいです。

主動的地位をうばって、それを保持するにも、受動的地位を主動的地位に転化させるにも、勇敢な精神が必要です。けれど、こういう勇敢さは、がむしゃらにやることではありません。わたしは、はじめて空中戦の訓練に参加したころ、自分が主動的地位にあって相手を攻撃するとき、盲目性がとてもひどかったのです。相手が上にいようと下にいようと、また、その動きがどんなに複雑であろうと、そんなことには一切おかまいなしに、いきなり猛攻撃をかけまし

た。そして、これこそ勇敢なのだ、主動的地位を保持できるのだと思いこんでいました。しかし、実際にはしばしば逆の結果をまねいたのです。わたしにはつぎのような教訓があります。馮喬政と空中戦の訓練をしたときのことですが、はじめのうち、わたしはかれに食いさがって、主動的地位にたっていました。けれど、突破口をみつけることができず、やたらと攻撃をしかけるだけで、相手の動きを観察したり、判断したりすることにも注意を怠っていました。すると突然、馮喬政はわたしの横腹めがけて急上昇してきたかと思うと、たちまち速度を落として、わたしからのがれ去り、すぐさま、おそいかかってきました。そのため、わたしは手をくだす間もなく、主動的地位から受動的地位にたたされ、攻撃する地位から攻撃される地位においこまれてしまったのです。

それからというもの、わたしは空中戦をするときはいつも、突破口をみつけるように、相手の動きに注意をはらうようにつとめました。けれど、空中戦は銃剣で渡りあうのとはちがいます。銃剣で渡りあうときは、双方が正面から向かいあっているので、相手の表情や手の動きで精神状態や戦法を判断することができます。ところが、空中戦の場合は、一方が前にいて他方が後ろにいるので、相手の表情が見えませんし、敵機の動きによってしか敵の精神状態や戦法

を見わけることができません。たとえば、ある敵機は、わたしたちが食いさがると、窮地からのがれようとして死にものぐるいで急上昇します。見たところいかにも勇猛のようですが、ほんとうは、臆病で、やられるのをこわがっているのです。また、ある敵機は、動きがもたもたして、反撃できるときでも反撃しません。これは、敵が受動的地位からぬけだす勇気と自信に欠けていることを物語っています。また、ある敵機は、はじめのうちは元気いっぱいで、反撃にでようとしますが、あとがつづきません。これは、敵がしだいに自信をうしなったことをしめしています。空中戦では、それぞれの状況に応じて、それ相応の対策をたてれば、主動的地位をわりと保持することができて、勝利をおさめることができるのです。

勇敢さは無鉄砲ではありません。それはプロレタリア的自覚という基礎のうえにうち立てられるものですし、敵味方の双方の状況にたいして科学的な分析をおこなったのちにうみだされるところの、敢然とたたかい敢然と勝利をかちとろうとする思想と行動なのです。このような勇敢な精神をもっていてこそはじめて、すばやく接近して、正確に、思いきった戦法で空中戦の主動権をうばいとることができるのです。一九五八年七月二十九日、わたしたちの中隊の同志たちが有名な「三対〇」の戦果をあげたのも、こうした勇敢な精神を発揮して主動権をとっ

たからです。

その日、戦場は雲が低くたれこめていましたが、ずるがしこい敵機はそれを利用して身を守ろうと、雲の上すれすれに飛んできました。そのとき、もし、わたしたちがいつものように、四機ばらばらに雲をつきぬけて飛びあがり、雲の上に出てから編隊をくんで戦闘をはじめる方法をとっていたならば、敵にたやすく発見されて、編隊をくむまえに攻撃をうけていたことでしょう。当時の状況からみて、主動的地位をうばうには、低空で編隊をくんで雲の中に突っこみ、かくれたまま敵機に接近し、雲を出たとたんに戦闘をしかけるのがもっともよい方法でした。しかし、わたしたちの中隊の同志は、これまで低空で編隊をくんで雲の中に突っこんだことがありませんでした。これをやれば、雲の中では視界がきかないので、へたをすると、味方の飛行機同士が衝突する恐れがあります。隊長機の趙徳安同志は、主動権をうばうために、みんながある程度の技術的基礎をもっていることも考えて、思いきって低空で編隊をくんで雲の中に突っこむことにしました。わたしたちが雲を突きぬけると、四機の敵機がびくびくしながら雲の上すれすれに飛んでいるのを発見しました。趙徳安、高長吉同志たちはこれに不意討ちをかけ、無防備になっているところを猛然と攻撃して四機のうち三機を撃墜・撃破したので

す。

もちろん、空中戦がいつもこのように順調にいくとはかぎりません。わたしたちも受動的地位においこまれたことがあります。けれど、「**主動と勝利は、劣勢と受動的地位にあるものが、実際の状況にもとづき、主観の能力のはたらきをつうじ、一定の条件をかちとることによって、優勢で主動的地位にあるものの手から奪取できるものである**」（『持久戦について』）と毛主席が教えているように、わたしたちがプロレタリア階級の勇敢な精神を発揮するならば、受動的地位を主動的地位に転化させることができるのです。わたしは、はじめて空中戦に参加したとき、つぎのような状況にぶつかったことがあります。

ある日、十二機の敵機がこっそりと海面すれすれに侵入してきて、突然高く舞いあがりました。わたしたちの中隊の四機と兄弟中隊の四機は、これを迎え撃つためただちに飛びたちました。けれど、そのときにはもう、敵はわたしたちの頭上にきていました。敵に主動権をにぎられていたのです。数でも高度でも位置でも敵は優位にたっていて、わたしたちは敵の銃口の下におかれていました。敵は居丈高になって、「下にいる。絶好のチャンスだぞ」と気ちがいのようにわめきたてました。こうした受け身の、険悪な事態にぶつかって、もしも、わたしたち

が少しでもこわがったり、ためらったりすれば、重大な損失をまねくことになるでしょう。けれど、わたしたちは毛沢東思想で武装した人民の飛行士です。敵の気炎などにはびくともしないで、一人ひとりが怒りに燃えて、まるで虎のように、すばやく、猛烈な勢いで敵機の群れに突っこんでいきました。たちまち、敵味方がいりみだれて戦うという状況になりました。わたしたちは敵に食いさがるし、敵もわたしたちに食いさがります。わたしたちは敵に食いさがられると、おそれるどころか、逆にますます敵にたいする憎しみがつのり、ますます敵をやっつけてやろうという勇気がわいてきました。すると、僚機から「後方に敵機がいる」と知らせてきました。隊長機はただちに、「方向転換して反撃をくわえよ」と指示しました。敵の鼻息が荒いので、わたしたちはつづけざまに反撃をくわえて、まず敵を精神的に圧倒しました。わたしたちの中隊の張以林が二機の敵機に食いさがられたとき、隊長機の高長吉はすぐさま方向転換してこれにぶつかっていきました。この二機の空中強盗は手むかおうともしないで、あわててにげだしました。そのとき、別の一機がふらふらと張以林の前に飛びこんできました。張以林は勢いに乗じてこの敵機を追撃するや、わずか数発の弾で撃ち落としてしまったのです。

わたしたちの勇敢な反撃によって、情勢はたちまち変化しました。わたしたちは戦えば戦う

ほどますます勇敢になり、敵は戦えば戦うほどますます臆病になっていきました。このとき、矛盾が転化したのです。敵は攻撃から退却に転じ、主動的地位から受動的地位に転化し、わたしたちは防衛から進攻に転じ、受動的地位から主動的地位に転化したのです。この戦闘で、はじめのうち、わたしたちはきわめてあぶない状態におかれていたのですが、みんなが勇敢に戦って、犠牲をおそれぬ精神を発揮したために、受動的地位を主動的地位に変え、敵の攻撃を撃退したばかりでなく、敵機二機を撃墜・撃破する戦果をあげることができました。

実践をつうじて、わたしは、勇敢な精神こそ空中戦で主動的地位をうばい、受動的地位からぬけだすうえで決定的な役割を果たすのだ、ということを深く認識しました。どんなに危険で緊迫した状況のもとでも、勇敢で、しっかりしているならば、受動的地位を主動的地位に、劣勢を優勢に、不利を有利に変えることができますし、最後に勝利をかちとることができるのです。

勇敢さは「空中で白兵戦をまじえること」ではっきり示される

空中戦は食うか食われるかの格闘です。わたしたちも敵を消滅しようとしますし、敵もわた

したちを消滅しようとします。けれど、わたしたちは、敵にうち勝つ宝刀をもっています。それは、林彪副主席がわたしたちに指示している白兵戦です。これは、自分の長所で敵の短所を突く戦術であって、もっとも効果的に敵を消滅し、自分をまもることができるのです。

わたしたちの飛行士は戦闘のさい、ひじょうに勇敢です。これはわたしたちの長所です。それにひきかえ、敵の飛行士はずるがしこく頑固だけれど、命を惜しみ死をおそれます。これはかれらの短所です。敵の兵器や装備は一般的にわたしたちよりまさっています。これはかれらの長所です。わたしたちの兵器や装備はいくらかおとっています。これはわたしたちの短所です。空中戦で、もし敵を発見したとき、すぐさま敵に突進していって、敵と白兵戦をまじえれば、敵の兵器や装備を役に立たないようにさせることができ、かれらの長所は短所に変わってしまうでしょう。このようにして、わたしたちの長所をいかんなく発揮して敵を消滅することができるのです。ある空中戦のときのことですが、わたしたちの中隊の飛行士王銘硯が敵機に出あいました。そのとき、王銘硯はすぐさま敵機をめがけて突進し、敵に精神的に不意討ちをくらわしました。形勢不利とみた敵は、自分の飛行機の回転性能がすぐれているという有利な条件を利用して、王銘硯のまわりを旋回しながら、逃げだすチャンスと襲撃するチャンスをね

らっていました。けれど、王銘硯は敵に息つくひまもあたえませんでした。かれは両手で操縦桿をにぎりしめると、飛行機を傾斜させながら敵を追撃しました。つきまとわれた敵はあわてふためき、ふせぐばかりで、反撃することができず、兵器の性能もさっぱり発揮できません。王銘硯は勢いに乗じてますます敵機に接近し、敵にまつわりついたまま十四回も旋回して、敵の頭もはっきりと見えるようになったとき、はじめて発砲しました。砲弾はもののみごとに命中して、敵機はまるで頭のなくなったハエのようにまっさかさまに落ちていきました。この「空中での白兵戦」は、人の主体的な能動性をいかんなく発揮したために勝利をかちとれたのです。

以前、一部の同志たちはこう考えていました。飛行機は一秒間に数百メートルもの速さで飛ぶのだから、接近して戦えば、敵機と衝突する恐れがある。そうなったら、たとえ敵を消滅できても、自分を保存できないかもしれない。だから、少し遠いところからやっつける方がよい、と。その後、わたしたちは、自分を保存し、敵を消滅するという毛主席の指示をくりかえし学習しました。毛主席はこういっています。「**効果的に自己を保存するには、敵を大量に消滅するほかはないので、戦争の目的のうちでは、敵を消滅することが主要なもので、自己を**

保存することは第二義的なものである。」（『持久戦について』）これで、わたしたちは、戦うとき、なによりもまず敵を消滅することを考えなければならないし、近接戦は敵を消滅するもっともよい方法であるということが理解できました。遠くからでは、射撃の命中率が落ちるし、ときには敵を攻撃できないだけでなく、逆に敵のミサイルに当ることもありうるのです。地上で小銃をつかって射撃する場合、目標が固定していても、少しはなれているときには、照尺をのぞいて、三つの点が一直線になるようにするのです。ちょっとでもずれると、命中しません。近ければ、ねらいを定めるのも簡単で、銃を向けるだけで命中することもあります。ところが、空中では敵味方の双方の飛行機は高速度で飛んでいるので、遠いところから正確にねらいを定めるのは小銃の場合よりもずっとむずかしいのです。けれど、近づけば、正確さはぐっと増すのです。この点を、わたしは実戦のなかでとくに深く感じとりました。

もちろん、戦闘機は速いので、戦闘中に衝突することだってあるでしょう。けれど、戦闘では危険を冒してもやりぬく精神がなければなりません。「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」①で、危険を冒さなければ、敵を消滅することはできないのです。いざというときには、

① 「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」は中国のことわざで、毛沢東著『実践論』にみられる。

命をすてて敵機にぶつかっていかなければなりません。わたしたちは自覚をもったプロレタリア戦士です。全人類の解放のために、水火の中へもとびこんでいって、勇敢に命をささげることは、わたしたちの本懐ですし、もとより死など恐れはしません。わたしたちが死ぬのは、より多くの人びとが生きるためですし、個人を犠牲にして集団を保存するためなのです。人民がわたしに、敵機にぶつかっていくことをもとめるなら、わたしは目を大きく見ひらき、敵機をぐっとにらみつけ、照準をぴたりとあわせ、飛行機を落ち着いて操縦し、猛然とぶつかってゆきますし、泰然、従容、嬉々としてぶつかってゆきますし、死んでも精神はほろびることはありません。このような死は敵をふるえあがらせ、人民をはげますことでしょう。

勇敢さこそわれわれの絶対的優勢である

「徹底した唯物論者はなにものをもおそれない。」① 毛沢東思想で武装した、自覚のあるプロレタリア革命戦士は、どんな困難もおそれませんし、どんな兵器、どんな敵もおそれません。

① 「徹底した唯物論者はなにものもおそれない」は、毛沢東著『中国共産党全国宣伝工作会議における講話』にみられる。

ところが、現代修正主義者と一部の臆病者は、アメリカ帝国主義が吹聴する「空の優勢」を死ぬほどおそれています。けれど、わたしたちから見れば、アメリカ帝国主義の「空の優勢」など、別にたいしたことではありません。かれらのいう「優勢」とはいったいどういうものなのでしょうか。飛行機の速度がはやく、空対空ミサイルをもち、滞空時間が長い、などといったぐらいのことです。これについて、わたしたちの中隊の同志はもうなんども討論をして、アメリカ帝国主義の「優勢」をやたらに信じてはならないし、一分為二（二つのものが分かれて二つになる――訳注）の見方で正しくそれを見なければならない、と考えています。アメリカ帝国主義の「優勢」は、しばしばそれ自身がもっている救いようのない多くの欠陥のために、割り引かれるのです。たとえ、かれらがこれらの面でいくらか「優勢」であるとしても、その優勢はやはり相対的なものでしかありません。

では、こうした「優勢」について具体的に分析してみましょう。

「速度がはやい」ということ。一部の敵機は速度がはやいということは事実です。しかし、空中戦では、速度が増せば、照準をあわせて射撃する時間が短くなるので、命中率も落ちます。また、はやくなればなるほど、方向転換はますますむずかしくなります。それは、自転車

に乗るときと同じで、はやく走れば走るほど、回転半径が大きくなって、小まわりしようとするとひっくりかえってしまいます。飛行機が旋回するときもこれと同じ理屈です。敵機がわたしたちを攻撃してきたとき、わたしたちは、速度がおそく、回転半径が小さいという長所を利用して、すばやく身をかわせますから、敵機は空を切って前方へ突進してゆきます。敵機がひきかえしてきたとき、わたしたちは勢いに乗じ、横っ腹に猛烈な攻撃をかけて、撃ち落とすことができます。ですから、速度がはやいという敵機の優勢は、速度がはやいということ自身がもつ多くの欠陥のために割り引かれてしまうのです。

「ミサイルを積める」ということ。ある敵機は空対空ミサイルを積んで遠距離からわれわれを攻撃することができます。けれど、ミサイルを積んでいるので飛行機の重さがそれだけふえて、速度も落ち、動きもにぶります。これは、わたしたちに乗ずるすきをあたえます。もっと重要なことは、ミサイルは遠距離からしか発射できないので、わたしたちが大胆に敵機に接近していきさえすれば、ミサイルは「無用の長物」となって、わたしたちをやっつけることができないばかりか、かえって、わたしたちにわけなくやっつけられてしまいます。へたをすると、かれらは自分で自分をやっつけることにもなるのです。昨年、ミサイルを積んだアメリカ

帝国主義の飛行機がわが国の海南島上空に侵入してきました。そのとき、わが海軍航空兵が接近すると、敵はあわてふためいて、むやみやたらとミサイルを撃ってきました。けれど、わたしたちに命中するどころか、かえって、味方の一機を撃ち落としてしまい、もの笑いのたねになったのです。

「滞空時間が長い」ということ。アメリカ帝国主義は対外侵略をやるために、飛行機の往復飛行時間はかなり長いのです。けれど、基地を遠くはなれて他国で作戦をおこなっているために、往復の時間をのぞくと、実際に作戦につかう時間はたいして多くはありません。それに、飛行時間が長いために、積んでいくガソリンの量も多くなります。というわけで、飛行機の重さがふえるばかりか、ひとたびわれわれの砲火をあびると、たちまち火がついて爆発しやすいのです。

以上が、アメリカの空中強盗の「優勢」にたいするわたしたちの考え方です。わたしたちがかれらをべっ視するのは、かれらの兵器や装備などについて科学的な分析をおこなっているからだけではありません。それよりもっと重要なのは、わたしたちが、「**武器は戦争の重要な要素ではあるが、決定的な要素ではなく、決定的な要素は物ではなくて人間である**」（『持久戦

について』）という毛主席の教えをはっきりと理解しているからです。わたしたちは、アメリカ侵略者が腐敗し、軟弱であることをよく知っています。また、かれらの飛行士はひじょうに反動的で、ずるがしこいけれど、命を惜しみ死をおそれています。かれらの軍隊では、上官と兵士とが対立し、上級と下級とが対立し、それぞれの軍種や兵種も対立しているために、さまざまな矛盾をかかえています。おまけに、かれらは不正義の戦争をやっている人殺しであり、強盗であるために、どこでも人民の反対にぶつかっています。ですから、戦闘のさいには、「つんぼ」、「めくら」にならざるをえません。基地を遠くはなれて戦争をやっているかれらは、いたるところで撃ちのめされ、空中で打撃をうけるばかりか、地上からも防空火力の打撃をうけています。そのために、かれらの飛行士は戦闘のあいだじゅう恐怖にとりつかれているのです。これが敵の克服できない弱点ですし、かれらの絶対的な劣勢なのです。

人類の戦争史では、これまで、おとった兵器を手にした革命的人民がすぐれた兵器や装備をもつ反革命にうち勝ってきました。こんにち、アメリカ帝国主義はまだあれやこれやと優勢を吹聴しています。しかし、かれらにはかれらなりの「優勢」があるでしょうが、わたしたちにはわたしたちなりの優勢があるのです。かれらはかれらの「優勢」をたのんでたたかうでしょ

うが、わたしたちはわたしたちの優勢をたのんでたたかうのです。勇敢さ――これこそわたしたちの絶対的な優勢なのです。それは、どんな敵も奪いとることのできないものですし、敵のどんな「優勢」もおよばないものです。わたしたちは、ほかでもなくこの精神的原子爆弾によってあらゆる敵にうち勝つのです。

勇敢さの源は毛沢東思想である

わたしたちプロレタリア革命戦士の勇敢さは偉大な毛沢東思想から生まれるものです。それは、誠心誠意、人民に奉仕する革命的な品性をあらわしたものですし、敵にたいする憎しみと人民にたいする愛情をもっとも高度に、集中的にあらわしたものですし、世界のすべての反動派を消滅して、全人類を解放するまでは絶対に手をひかないという決意をあらわしたものです。

わたしたちは敵と闘争するとき、かならず生と死の問題にぶつかりますが、人民空軍の一戦士としていつでも人民の事業のために一身をささげる覚悟でいます。毛主席はわたしたちにこう教えています。「**奮闘すれば犠牲が出ることもあるし、人が死ぬようなこともつねにおこる。だが、人民の利益、大多数の人民の苦しみを考えるなら、人民のために死ぬことは死に場所をえたということになる。**」（『人民に奉仕する』）毛沢東思想で武装した戦闘機の飛行士の生命は、党のものですし、人民のものですし、プロレタリア階級のものです。わたしたちは党のため、人民のために生きなければなりません。そして人民がもとめさえするなら、わたしたちは死をおそれるものではありません。

私心がなくなってこそ、はじめてなにもおそろしくなくなるのです。私心は勇敢さの大敵です。人民の飛行士が敵と勇敢にたたかえるようになるには、まず自分のまちがった思想と勇敢にたたかわなければなりませんし、敵と命がけでたたかえるようになるには、まず自分のまちがった思想と命がけでたたかわなければなりません。

この点でわたしにはつぎのような教訓があります。

あるはげしい空中戦のときのことでしたが、わたしは僚機の飛行士として、敵を攻撃する隊長機を掩護していますと、とつぜん、敵の一機が左の方からわたしたちを襲撃してきたのです。わたしは敵機を発見すると、すぐに隊長機に報告しました。そのときの状況は敵を攻撃するのにひじょうに有利でした。もし、攻撃をくわえていたならば、敵を消滅できたでしょう

し、隊長機をもっとよく守れたことでしょう。けれど、わたしは、隊長機をほうっておいて、万一事故でもおきたら自分が責任を問われるという私心や雑念にとらわれていたものですから、敵を攻撃しようと思いながらも攻撃にふみきれませんでした。そのため、みすみす攻撃するチャンスをのがしてしまったのです。そして敵機を撃ち落とさなかったばかりか、危うく敵弾に当るところでした。けれど、同じ戦闘で、わたしたちの中隊の別の僚機の飛行士は、わたしとほとんど同じ条件にあるのに、あくまで敵をやっつけてやろうという一念で、積極的に行動して隊長機を掩護するとともに、敵の一機を撃ち落としました。これはわたしの場合とあざやかな対照をなすものです。

わたしはこのとき、兵器が新式なものであればあるほど、兵器を使う人間の思想はますます革命化しなければならない、ということを深くさとりました。プロレタリア思想の純潔性は、技術の正確さにくらべていく千倍も高く要求されなければならないのです。技術面での正確さが少しおとっていても、それほどたいしたことはありませんが、プロレタリア思想に純潔性が少しでも欠けていると、戦闘に大きな影響をおよぼします。私心や雑念がなければ、かちとれない勝利もかちとることができますが、私心や雑念があれば、かちとれる勝利もかちとることができないのです。

以前、わたしはこう考えていました。自分は貧しい家庭に生まれたのだから、思想は純潔だ。そして、なにか欠点があっても、思想の改造は長い時間をかけるものなのだから、まあ、ゆっくりやろうと、いつも自分の欠点を大目に見てきたのです。けれど、こんどの戦闘をつうじて、わたしは、思想の改造は戦闘をやるのとおなじで、問題が出てきたらすぐに、徹底的にそれを解決しなければならない、とさとりました。とくに、「**革命に殉じた無数の戦士たちが人民の利益のために命を犠牲にしたことをおもえば、生き残っているわれわれ一人ひとりは胸がいっぱいになるのに、まだ犠牲にしきれない個人の利益、放棄しきれない誤りがあるというのか**」という毛主席のこの教えを読んだとき、わたしはひじょうに感動して、まちがった思想にうち勝とうという決意をいっそうかためました。こういう自覚をもつようになってからというものは、わたしは自分一人の損得にばかりとらわれている個人主義の思想と断固たたかいました。欠点やあやまりがあれば自分であばくとともに、みんながあばいてくれるのを歓迎して、すぐにあらためていきました。そして、ある期間たつと、すっかりあらためられたかどうかをまとめてみました。こうして、小さな勝利が積みかさなって大きな勝利となり、私心がだ

んだん少なくなり「公」の心が強くなって、勇気もひとりでにわいてくるようになったのです。その後、ある空中戦でわたしは敵機を追撃したことがありますが、接近しようとすると、地上の指揮員から「発砲せよ」という指示をうけましたが、そのとき、敵機とのあいだにはまだかなりの距離がありました。発砲が早すぎると、敵を消滅するのに不利です。以前だったら、わたしは上級の指示を機械的に実行したにちがいありません。けれど、そのときは、自分一人の損得などなく、ひたすら敵をやっつけてやろうと思いつめていたので、状況を考えてそのまま飛びつづけました。そして、いまこそというときになってはじめて発砲し、敵機を撃ち落としたのです。

とはいうものの、わたしにもう私心や雑念がまるでなくなったというわけではありません。いや、まだまだあるのです。なぜなら、思想闘争は長い期間かかるものですし、起伏があるものだからです。プロレタリア思想とブルジョア思想とのたたかいは、東風が西風を圧倒するか、西風が東風を圧倒するかのどちらかです。思想上の敵にうち勝つには、偉大な毛沢東思想にたよらなければなりません。わたしたちの頭のなかに毛沢東思想が多くなればなるほど、私心や雑念は少なくなり、勇敢な精神も多くなるのです。毛主席の著作を読み、毛主席の教えに

したがい、毛主席の指示どおりに仕事をしてこそ、闘争することを幸福と考え、革命に身をささげることを光栄と思うことができるのです。

毛主席はわたしたちにこう教えています。**「人類の戦争生活の時代は、われわれの手で終わらせることになる。われわれがすすめている戦争は、疑いもなく最終的な戦争の一部分である。」**（『中国革命戦争の戦略問題』）これこそ、このうえなく光栄な事業ですし、革命戦士としての最大の幸福です。もしも、アメリカ帝国主義が戦争をわたしたちに押しつけてくるなら、わたしたちは断固として、徹底的に、きれいに、のこらずかれらを消滅してしまうでしょう。

（一九六六年八月十七日づけ『人民日報』より）

唯物弁証法を用いて
戦士の思想転化の工作をおこなう

中国人民解放軍紅色第九中隊指導員　陳金元①

中隊の政治思想工作というのは、戦士の思想を転化させる工作のことです。つまり、毛沢東思想で戦士の頭を武装し、プロレタリア階級の思想の陣地をたえず強化し、拡大し、さまざまな非プロレタリア思想を克服し、毛沢東思想を戦士の頭のなかにしっかりとうえつけて、おくれたものをすすんだものに変え、すすんだものをいっそうすすんだものに変えることです。この工作をりっぱにやるには、なによりもまず、党の事業のことを考え、中隊の建設のことを考え、戦士に一生涯革命をやらせようと考える、そういう革命事業にたいする熱意と責任感がなければなりません。同時にまた、正しい思想方法と工作方法とが必要です。正しい思想方法と工作方法とはなんでしょうか。唯物弁証法です。わたしたちは実際の工作の中で、弁証法

① 陳金元はげんざい解放軍某部隊の連隊政治処副主任をつとめている。

を用いるように心がけたときには工作がうまくいくけれど、形而上学的なあやまりを犯して、問題を主観的、一面的に見たときにはうまくいかず、どんなに努力をしても、さっぱり効果はあがらないということをつくづくと知りました。これからお話しするのは、わたしたちが唯物弁証法を用いて、すすんだ同志とおくれた同志にたいして工作をおこなって得た体得です。

おくれた同志にたいしては正しい分析が必要である

以前、わたしたちは、一部のおくれた同志たちをまったくだめだと見ていました。それで、ついついかれらに冷淡な態度をとったり、ひどすぎる批判をしたりして、かれらに進歩する自信をなくさせ、また、他の同志たちに援助する自信を失わせていました。いったいどこに原因があったのでしょうか。主にはかれらを「一分為二」（一つのものが分かれて二つになる――訳注）の方法で根本的に分析することができなかったからです。そして、かれらの欠点を重く見たり、一面的に見たり、硬直して見たり、また、三分の欠点を五分に、一般的な問題を本質的な問題と見たりしたために、かれらも進歩できるということを信じなかったのです。

第一分隊に、入隊したときからしょっちゅう問題をおこしている戦士がいました。ある日、

夜間捜査訓練をおこなったとき、かれに仮想敵の役を務めさせたのだが、いざ同志たちが捜査をはじめる段になると、どこへいったのか見えなくなってしまいました。夜ふけまで捜しましたが影も形もありません。それもそのはず、一人で兵舎にもどって休んでいたのです。つぎつぎと問題をひきおこすので、みんなの目にはかれの欠点だけがうつって、長所が見えなくなってしまいました。それで、かれにたいする批判はますます多くなり、ときには的はずれの批判もあったりして、関係は悪くなるばかりでした。この同志の進歩を助けるために、わたしたちは第一分隊の中核の同志たちを組織して、「一分為二」の方法でかれを根本的に分析してみました。まず、みんなにかれの長所と欠点をのこらず出してもらってから、その長所と欠点の性質を分析しました。みんなは、この分析によって、かれの長所が本質的なもので、欠点は非本質的なものであることがわかりました。このように分析をすすめていくにつれて、いっそう頭がはっきりしてきて、認識が変わり、分隊の同志たちのかれにたいする態度も変わっていきました。同志たちはかれの長所をみつけては、くりかえし話してやり、たえずほめてやりましたし、かれの欠点にたいしては、各個撃破の方法で、一つ一つ殲滅しました。このやり方はこの戦士の積極性をぐっとひきだして、とうとうかれを大きく変わらせたのです。

このことから、わたしたちは、戦士にたいしてはかならず根本的な分析をやらなければならない、という教訓を得ました。戦士の思想はみな「一分為二」であって、積極的な要素もあれば消極的な要素もあるし、長所もあれば欠点もあります。しかし、この二つの側面はけっして半分ずつではありません。一般的には、積極的な要素が本質であり、主流なのです。おくれた同志はすすんだ同志にくらべて、欠点も多いし、進歩もおそいけれど、消極的要素がかれらの本質で、主流だということはできません。わたしたちの戦士のほとんどは労働者、農民の子弟であって、かれらの個人の利益と革命の利益は根本的には一致しています。かれらはみな毛主席のりっぱな戦士になろうとしていますし、進歩することを積極的にのぞんでいます。かれらの体にはいくらかふるい思想、ふるい習慣がついていますが、自己改造によってそれをだんだんと克服することができるのです。

おくれた同志を根本的に分析すれば、かれらにたいして深い階級感情が生まれてきますし、かれらの進歩にたいして大きな自信がわいてきます。もし、根本的な分析をしないで、問題を主観的、一面的に見るならば、かれらの欠点をつみあげて、非本質的な、一時的な、消極的な現象を本質的なものにしてしまいます。そして、停止の論点、悲観の論点が生まれてきて、か

れらを助ける情熱がうしなわれてしまうのです。

おくれた同志を根本的に分析することは、おくれた同志にいっそう正しく自分を認識させることにもなります。おくれた同志は、欠点が多いので、自分を見るさい、よく一点論（ものごとを一面的、形而上学的に見る――訳注）の誤りを犯しやすくて、進歩しようとする自信に欠けているものです。わたしたちはしばしばつぎのようなことにぶつかります。指導部がおくれた同志の進歩を信じているときは、かれらの自信は強まり、意気ごみは大きくなり、どんどん進歩するのですが、指導部がかれらを信じていないときは、しょんぼりして、やろうという意気ごみが足らなくて、進歩もおそいのです。おくれた同志が進歩する過程では成績があがったりさがったりして、起伏がありますが、それは、往々にして、わたしたちのかれらにたいする見方が正しいかまちがっているか、工作が正しいかまちがっているかということと深いかかわりがあります。

おくれた同志が自覚して思想を改造するように導く

「唯物弁証法は、外因を変化の条件、内因を変化の根拠とし、外因は内因をつうじて作用す

るものと考える」（『矛盾論』）と毛主席はいっています。おくれた同志の思想を転化させる工作のうえでもっとも重要なことは、かれらが自分からすすんで思想上の「けんか」をおこさせ、自覚して自分を改造することにたよらなければならないということです。おくれた同志は自分の思想との「けんか」をつうじてはじめて、頭の中のプロレタリア思想に非プロレタリア思想をうちやぶらせることができるのですし、おくれたものからすすんだものに変わることができるのです。もしも、自分で自分の思想と「けんか」しないで、他人の力を借りて自分の思想と「けんか」するだけならば、勝てないばかりか、にらみあいになって、どうにもこうにもならなくなってしまうでしょう。

けれど、外因も事物の発展に重要な作用を果たします。指導部や同志たちの援助は、おくれた同志が変化するのに、大きな影響力をもっています。わたしたちは、内因の作用ばかりを強調して、おくれた同志を助ける責任をのがれ、かれらをほったらかしておくようなことがあってはなりません。もちろん、外因は内因をつうじてはじめて作用するものです。おくれた同志を援助するには、政治を突出させ、生きた思想をつかんで、おくれた同志がブルジョア思想をうちほろぼしプロレタリア思想をうち立てる思想闘争をくりひろげるように教えて、思想的な

自覚を高めさせるようにしなければなりません。政治指導員は中隊の政治思想戦線での指揮者です。わたしたちの戦場は戦士の頭の中にあります。そして、わたしたちの任務は、戦士たちがブルジョア思想をうちほろぼし、プロレタリア思想をうち立てる思想戦をやるのを助けることです。わたしたちの工作がうまくやられればやられるほど、おくれた同志の思想戦はうまくいき、進歩もはやくなるのです。けれど、わたしたちの工作が主動的でなく、方法がまちがっていたならば、かれらの思想戦に影響をあたえることになるでしょう。

おくれた同志の思想戦を援助するには、根本をつかみ、世界観の改造をつかまなければなりません。つまり、毛沢東思想をそそぎこむ工作、毛沢東思想をあらゆる方法で、一滴一滴おくれた同志の頭の中にそそぎこむ工作をりっぱにやらなければなりません。おくれた同志の主要な問題をつかんで、かれらが毛主席の著作を活学活用するのを助け、学んだらはげまし、用いたらほめてやり、りっぱに用いたらそれを総括するのを助けてやらなければなりません。かれらが実際問題と結びつけて用いることに思いきり力をいれるように、毛沢東思想で非プロレタリア思想をたえず批判するようにみちびかなければなりません。このようにすれば、毛沢東思想が一歩一歩かれらの頭の中で陣地を占領し、しっかりと根をおろして、おくれているものか

らすすんでいるものへ変わることができるのです。第四分隊にわりと欠点の多い戦士がいました。毛主席の著作の学習をはじめたばかりのころ、かれは自分の思想にはふれようとしないし、いうこととやることは別々だし、口では「一分為二」をいいながら、実際には、自分の長所ばかり見て、他人の欠点ばかり見るし、分隊のなかでうまく団結できませんでした。あるとき、かれが「一分為二」についての文章を学習していたので、わたしはかれにたずねました。「学習はどうだね？」かれは答えました。「毛主席のいっておられるこの道理はよくわかります。話してあげましょうか」わたしは「こうしよう。『一分為二』の観点で自分の思想をよく分析して、それをあした聞かせてくれたまえ」といいました。かれはこれをきいてたいへんよろこんで、帰るとすぐに自分のあらゆる長所をはたき出して、それを紙に書いてみたのです。ところが、いざわたしに話そうという段になって、どうもおかしいと感じました。「指導員は『一分為二』について話せといったけれど、自分の長所だけならべるのは一点論ではないか？」そこで、かれは思想闘争をして、自分の長所と欠点に全面的な分析をくわえたのです。わたしはこれをきいて、「申しぶんなく学んで、りっぱに使えるようになった」とほめましたので、かれはたいへんよろこびました。その後、かれはさらに「一分為二」の観点で、分隊の

一人ひとりの同志の長所をさがしだし、それとくらべて、自分の八つのおくれているところを見つけると、ひとつひとつ実際の活動のなかで克服して、思想を大きく進歩させました。かれは深く体得したことをつぎのように語りました。「『一分為二』を学ぶとき、分析することができるようになり、とりわけ闘争することができるようにならなければなりません。分析することができれば、自分の頭の中のすすんだ思想とおくれた思想をはっきりさせることができますし、闘争することができれば、毛沢東思想で自分のおくれた思想を克服し、たえず前進できるのです」

おくれた同志がうまく思想戦をやるように助けるには、かれら一人ひとりの特徴も考えなければなりません。あるものは問題が多いでしょうし、あるものは問題が少ないでしょう。あるものは問題の気のつき方がおそいでしょうし、あるものははやいでしょう。だから、具体的に分析して、区別してあたることが必要で、なにもかも一刀のもとに切りすてたり、ごった煮にするような方法をとってはなりません。もし、高粱と米とを分けないでごった煮にすれば、煮えたものもあり生のものもありで、よい効果はあがりません。

おくれた同志にたいして工作をうまくやるにはまた、中核となる同志にたより、大衆を立ち

あがらせるように十分注意し、中隊を赤い溶鉱炉に変えて、おくれた同志が変わるためのよい環境をつくりださなければなりません。つまり、中隊に毛主席の著作を学習するふん囲気を大いにもりあげ、政治的な空気を大いに濃くし、原則性を大いに強め、一人に問題があったらみんなが関心をよせ、一人に欠点があったらみんなが助けて、どこにでもあたたかい手があるようにしなければならないのです。おくれた同志は、このような赤い溶鉱炉のなかで、しっかりとした赤い後継者にきたえあげられるのです。もし十分に、中核となる同志にたよらなかったり、大衆を立ちあがらせなかったり、みんなが思想工作をおこなわなかったりすれば、おくれた同志にたいする教育工作は効果をあげることができないでしょう。これは、おくれた同志がすすんだ方向に転化するうえで不利となります。

おくれたものがすすんだものに変わるのは、反復した闘争の過程である

おくれたものがすすんだものに変わるのは、簡単なことではありませんし、しばしば長い困難な闘争の過程が必要です。プロレタリア思想をうち立てるには非プロレタリア思想を克服し

なければなりませんし、刻苦奮闘する作風を身につけるには怠惰な作風を克服しなければなりませんし、唯物弁証法の観点をうち立てるには形而上学の観点を克服しなければなりません。おくれた同志の体についたふるい思想、ふるい習慣は、主流ではありませんが、一日や二日でつくられたものでもありません。ある欠点はつくられてからかなりの時間がたっていて、根も深いのです。こういうふるい思想、ふるい習慣をうち破って、新しい思想、新しい習慣をうち立てるのはたいへんな仕事です。たとえば、行軍という小さなことをとってみても、ある同志は、家にいたときは一キロの道をいくのにも電車に乗っていたので、ひと晩のうちに五十キロ行軍せよと突然いわれれば、苦しい思想闘争をしなければならないわけです。同志たちのなかに、苦しさに耐えられなくなって、不平をいい、落後するものが出てもけっして不思議なことではありません。かれらは、困難とたゆみなく闘争して、実際の鍛練のなかで、苦しみをおそれず疲れをおそれない思想をうち立てることができるのです。以前、わたしたちは、おくれたものをすすんだものに変えるには時間もながくかかるし、とても困難なことであるという認識が足りませんでしたので、かれらがなかなかハガネにならないのに腹をたてて、工作のやり方がついせっかちになり、かれらが欠点をはやく改めてしまうように要求したりしました。これ

は、せっかちな炊事員が釜の中の米のことなどおかまいなしに、どんどんかまどの火をもやすようなもので、動機はよくてもさっぱり効果はあがらず、おくれた同志をいよいよ気落ちさせる結果になるだけです。

おくれたものがすすんだものに変わることは、量から質への変化の過程であって、一定の段階に達してはじめて急激にすすみ、飛躍がうまれるのです。変化しはじめたばかりのときは、問題にたいするおくれた同志の認識は、すすんだ同志のようにはっきりしてはいないので、問題の処理もすすんだ同志のように正しくはいきません。しばしば思想と行動とがつながらないものです。ある同志は行動ではやっているけれど、思想認識はまだそれほど自覚的ではありません。また、ある同志は認識は高まったけれど、行動がすぐそれについていきません。わたしたちはこう考えます。おくれた同志のこういう変化は、目だつほどのものではありませんが、それは進歩への明るいめじるしですし、成長する小さな苗なのです。わたしたちはこういう苗を見つけ、それをかれらの変化を助けるための突破口にして、しんぼう強くきめの細かい工作をすすめ、あふれるような熱情をもってかれらの進歩を促さなければなりません。かれらがりっぱな行動をしたら、たとえ認識がたりなくても、かれらの「動機が不純」であるとはいえな

いし、かれらがその行動を基礎にして認識を高めるように助けなければなりません。また、かれらがある程度認識したならば、たとえ行動がともなわなくても「言行が一致してない」とはいえないし、かれらが正しい思想を行動にあらわすようにみちびき、すすんだ方向へ変化していくように一歩一歩促さなければなりません。そうでなかったら、かれらの進歩にすぐさま力づよい援助をあたえることはできません。

おくれた同志が進歩していく過程では、一般にだれでも、気分が高ぶったり沈んだり、ふるい立ったりしょげこんだりをくりかえすものですが、これは正常なことなのです。こうしたくりかえしをやっていかなければ、新しい思想とふるい思想、新しい習慣とふるい習慣のどちらが勝つかという問題は完全には解決されませんし、毛沢東思想がほんとうに根をおろすこともできません。わたしたちはくりかえしのあることを承認し、そのくりかえしを認識し、そのくりかえしの原因を研究しなければなりませんし、人の思想の変化の法則をつかんでこそ、はじめてそのくりかえしをできるだけ少なくすることができるのです。第六分隊に、ふるい習慣にそまっているため、しょっちゅう口論やけんかをする同志がいました。はじめ、かれは分隊長と口論をやったので、わたしはかれがまだ若く未熟のせいだと思って、かれと話しあいまし

た。そしてかれも反省しましたので、この問題は解決したものと思っていたのです。しばらくしてまたこんどは他の同志とけんかをやり、訓練さえもすっぽかそうとしました。そこでわたしはもう一度かれを教育しました。かれも自分の欠点をきっと改めるといいました。ところがあきれたことに、しばらくするとまた、もう一人の同志とけんかをやり、おこって飯もくわずに、無断で町にビスケットを買いにいってしまったのです。いったいなぜこの戦士の欠点が二度も三度も出てくるのか？　くわしく分析し、研究してみて、その原因がはっきりしました。つまり、一方では、かれのふるい欠点がまだ徹底的にあらためられていないで、頑固な習慣の力が残っていること、他方では、かれはまた進歩をのぞんでいるし、誤りを犯したらそれをひどく後悔もすること。このように思想上に二つの力があって、綱引きのように引っぱったり引っぱられたりの激しい闘争がおこなわれているので、誤りを犯したら検討し、検討したらまた誤りを犯して、誤りと検討とが何度もくりかえされることになるのです。その後、わたしはかれのこういう特徴をつかんで、かれが毛主席の著作を活学活用するのを助けて、たえず思想工作をすすめ、かれの階級的自覚を根本から高めるようにつとめました。それと同時に、みんながかれに進歩する条件をつくり出してやるとともに、誤りを犯す条件をなくしてやらなければ

なりません。こうして、かなり長いあいだ助けていったので、この戦士の欠点はだんだんと克服されていきました。

わたしたちは実際の工作をつうじて、戦士たちの思想の変化はひじょうに複雑で、それにたいするわたしたちの認識と工作を簡単化できないことがわかりました。おくれた同志にたいして工作するには、しっかりつかんではなさず、最後までつかむ精神で、「持久戦」をやらなければならないし、一度やればそれでよいというものではけっしてないのです。はじめは、かれらが勇敢に自分のふるい思想と「白兵戦」をやるように励まし、少しでも勝利したら、ひきつづき戦うように励まさなければなりません。すすんだ思想が優勢を占めたときは、気をゆるめないように励まし、消極的な要素が風上になったときは、「熱風」を吹きこんで、悲観したり、がっかりしたりしないように教育しなければなりません。どんな状況の下でも、おくれた同志にたいしては「一分為二」で見なければなりませんし、一時進歩したからといって、それでもうよいと考えてはいけないし、一時横道にそれたからといって自信を失ってはいけません。そして、かれらが自覚して思想革命をすすめるようにうむことなく導かなければなりません。

すすんだものにたいしても「一分為二」で見、すすんだものをいっそうすすんだものにしなければならない

すすんだものとおくれたものとは対立面の統一であって、たがいに転化するものです。おくれたものがすすんだものに、すすんだものがいっそうすすんだものに変わるし、すすんだものがおくれたものに変わることもあります。すすんだものとおくれたものとは相対的なもので、わたしたちはかならず、「一分為二」の観点ですすんだ同志を見て、すすんだものがいっそうすすんだものになるように促すとともに、すすんだものがおくれたものになるのを防がなければなりません。以前、わたしたちには、すすんだ同志を見るうえで、二つの一面性がありました。一つは、かれらがまったくすばらしいと考えて、弱い環をつかむのをおろそかにしたこと、もう一つは、かれらがほんとうにすすんでいることを信じないで、ちょっとした欠点をつかまえて、かれらの先進性を否定したことです。なぜこういう誤りを犯したのでしょうか？もっとも主要なことは、「一分為二」の観点がたりなかったからなのです。

すすんだ同志には長所が多いし、自覚もわりと高いものです。けれど、かれらにも非プロレ

タリア思想があるし、弱い環があるので、おごり高ぶる気持ちが生まれやすいし、思想の改造をおろそかにしたり、虚栄を身につけたりして、根本をすててしまうようになるのです。わたしたちはかれらをかならず「一分為二」で見て、かれらを偏愛したり、かれらのいいなりになったりしてはなりません。かれらが自分自身にも「一分為二」で対処し、たえず革命的な思想をうち立てるよう教育しなければなりません。まじめで責任のある態度と、厳格な要求をもって、かれらが弱い環を克服するように助けてやり、とくに、毛主席の著作の学習にたいしては、いいかげんにしたりしないで、かれらがもっとしっかりととりくみ、もっと多く学び、もっと深く理解し、もっとりっぱに用いるように要求しなければなりません。弱い環をつかまえるときには、根本的な性質の問題をつかまえるようにしなければなりません。そして、生活上のこまごましたことを突っつき、かれらをびくびくさせ、主要な欠点を克服するのに注意力を集中できないというようにしてはなりません。

実際の工作の中で、わたしたちはまた、すすんだ戦士に完全無欠を要求するという、もう一つの一面性の誤りを犯しました。かれらの欠点に大騒ぎをし、とりわけ、おくれたものからすすんだものへと変わった同志にたいして、しばしばかれらの小さな欠点をつかまえてすべてを

否定してしまうというようなことをやったのです。その結果、これらの同志の積極性をくじくことになりました。わたしたちの中隊に劉国良という同志がいますが、かれは入隊したばかりのときは、「高慢ちき」で有名でした。その後、かれは毛主席の著作をまじめに活学活用したので、思想が大きく変わって、すすんだ戦士の隊列にはいるようになりました。かれは長所もわりときわだっているのですが、欠点もいくらかあって、それを一部の同志がつかまえて、さかんに「冷たい風」をまきおこしたのです。あるとき、かれは中隊本部に申告もせずにはいっていくと、指導者がいたのでこそこそともどってきました。それを一部の同志が「なんだ、おまえは相変わらず昔のままじゃないか」といったため、仕事にたいする情熱は一時すっかりさめてしまいました。けれどその後、わたしたちがこれらの同志に教育をしたので、かれらはつぎのことがわかったのです。劉国良の欠点は長所にくらべれば一本の指と九本の指のようなものなのだから、かれに欠点があるからといって、主要なすすんだ面を否定したりしてはいけない。すすんだ戦士にきびしく要求することは正しいけれど、そのきびしさも実際にそくしたもの、理にかなったものでなければならないし、いきすぎてはならない。かれらの欠点にたいしては、具体的に分析すべきであって、枝葉の問題を原則的な問題にしたり、偶然にあった問題

を一貫した問題とみなしたり、実際問題を思想問題にすべきではない。このようにしてこそはじめて、かれらの積極的な要素をひきだし、かれらの弱い環を克服するうえで、ほんとうに役立つことになるのです。

すすんだものをいっそうすすんだものにするには、かれらの弱い環をつかまえるほかに、すすんだ要素をつかまえ、それをひきつづき発展させて、いっそう突出させる必要があります。すすんだ要素を突出させて、毛沢東思想の赤旗をいっそう高くかかげるならば、消極的な要素を克服しようとする自覚がいっそう強まって、力もいっそう大きくなるのです。プロレタリア思想という鏡があれば、非プロレタリア思想をいっそうはっきり見ることができますし、唯物弁証法という定規があれば、形而上学的思想をいっそう正しく見ることができます。すすんだ要素をつかまえることをおろそかにして、欠点ばかりつかまえるなら、すすんだ戦士はぼんやりしてしまって、方向もはっきりと見えなくなり、手も足もちぢこまり、自分の長所を十分に発揮しにくくなったり、創造し、前進しにくくなったりするのです。昨年のはじめ、わたしたちの中隊のあるすすんだ同志が、毛沢東思想を運用して軍事訓練を指導した経験をまとめて、それを兄弟の中隊で紹介してひじょうに歓迎されたことがあります。ところが、一部の同志は

善意からなのですが、すすんだものにたいしては欠点をしっかりつかまえなければならないと考えて、かれが学習に努力したり、大胆に創造しようとしたりする精神をふるいたたせることに気をくばらず、逆に、かれの生活上のあれこれの欠点をとらえて、必要以上に批判したり、非難したりしました。そのために、この同志は小さなことばかりつかまえて、大きなことをほうっておき、生活上の欠点を改めることばかり気をくばり、よい面を十分にのばすことができなくなって、一時進歩がとまってしまいました。わたしたちは、この教訓から、すすんだ同志にたいしては、かれが欠点を克服するように助けなければならないけれど、長所ものばすように助けなければならず、また、すすんだ同志に弱い環を克服させるとともに、大いにすすんだ要素をのばさせ、革命的な意気込みをふるいたたせて、いっそうすすんだものになるように教育しなければならない、ということを知りました。このようにして、すすんだものとくらべて、すすんだものから学び、すすんだものに追いつき、すすんだものを追いこそうとする気運がもりあがりました。そして、毛主席の著作を学習する空気がいちだんと濃くなりましたし、積極的な要素がいちだんと発揮されるようになりました。

わたしは、唯物弁証法を用いておくれたものをすすんだものに、すすんだものをいっそうすすんだものに変えるという転化工作をりっぱにやることは、たえず学習し、たえず実践し、たえず高まっていく過程だと思います。この面で、わたしのやったことはまだまだ不十分なものです。今後、わたしは、いっそうりっぱに毛主席の著作を活学活用し、自分の思想の革命化を強め、できるだけ自分の頭の中の弁証法を多くし、形而上学を少なくして、戦士の思想を転化する工作をいっそうりっぱにやっていく決意です。

（一九六六年一月十日づけ『解放軍報』より）

毛沢東思想で魂を改造する

中国人民解放軍某部隊副指導員　王道明

この数年、わたしは、党の教えと同志たちの援助をうけながら、毛主席の著作を活学活用して、思想改造をし、階級的自覚をいくらか高め、革命の道理がいくらかわかるようになりました。これからお話しするのは、わたしが「老三篇」①と毛主席のその他の著作を活学活用して、思想改造するなかで得たいくつかの体得です。

「生まれつき赤い」のではなく、「自覚的に赤くする」だけである

以前、わたしは思想改造についての自覚がたいへん低くて、「思想改造」ということばを聞

① 「老三篇」は毛主席の『人民に奉仕する』、『ベチューンを記念する』、『愚公、山を移す』の三つの文章をさし、中国人民から親しみをこめて「老三篇」とよばれている。

きたがりませんでした。わたしたちの世代は、党がつくってくれた学校に通い、新しい社会が出版した本を読み、小さいときから党の教育を受け、≪東方紅≫を歌い、赤いネッカチーフをつけて育ったのだから、革命の思想は小さいときからもっている、それに、わたしの家は貧農の出身で、父は革命幹部なのだから、頭の中に悪い思想など少しもうけついでおらず、改造など必要ない、わたしは生まれながらの赤い青年で、生まれながらの革命のあとつぎで、革命の道を歩むのはわかりきったことなのだ、といつも考えていました。家にいるとき、父がいつも「毛主席の著作をまじめに学習してしっかりと思想改造をしなければ、人間が腐ってしまって、誤りを犯すぞ」とわたしにいったものですが、そんな話はおどかしだ、ぐらいにしか思っていませんでした。

入隊すると、指導部から思想を改造しなければならないという話がありましたが、はじめのうちはやはりわかりませんでした。わたしは一生懸命りっぱな戦士になろうとしているし、思想のうえでも進歩しようとしているし、仕事、訓練、生産もみなまちがいなくやって、いつも表彰されているのに、まだなにを改造するのか、と思いました。

ところが、その後、あることからわたしの思想に矛盾が生じて、これまでの自分の考え方がまちがっていたことに気づきました。たとえば軍服について、わたしにはその形が「ひどくやぼったく」見えました。綿入れ靴が支給されたときなど、こんな「ドタ靴」はあまりにみっともないと思って、足がこごえるのに「ドタ靴」をはかず、運動靴をはいて町へいったこともあります。ところが、部隊の責任者やふるい同志たちを見ると、かれらは軍服や「ドタ靴」にたいへん満足しているのです。また、責任者はいつも、戦争のときの衣服や靴がたりなかったことをわたしたちに話してくれましたし、どんなときにも過去の苦しかった生活を忘れたり、人民のことを忘れたりしてはならないとわたしたちを教育してくれました。どうして自分が満足しないものを、責任者やふるい同志たちは満足しているのだろうか。どこに問題があるのだろうか。このようなことから、わたしは自分の思想にはたしかに改造しなければならないものがあるということに気づきはじめました。小さいときの「社会主義の砂糖つぼ」の中からでてきた自覚だけではだめらしいのです。

わたしが思想改造の重要性をほんとうにさとって、わりと自覚的に毛沢東思想で自分を改造

するようになったのは、「**雷鋒同志に学ぼう**」①という毛主席のよびかけがあってからのことです。わたしは、雷鋒同志が平凡でしかも偉大なことをやれ、共産主義の戦士になれたわけは、もっとも根本的にはかれが毛主席の著作を活学活用して、なぜ生きるのか、だれに奉仕するのかを知り、誠心誠意人民に奉仕する世界観をうち立てたからであるということがわかりました。以前、わたしも「老三篇」を学習しましたし、よいこともいくらかやりました。けれど、まだまだ雷鋒同志のようにすこしも利己的でなく、ひたすら他人につくしたわけでもありませんし、一つのことをやるたびに自分の思想改造に気をくばったわけでもありません。また、かれのように「人民のために生き、人民のために死ぬのだ」ということをほんとうに自覚してやったわけでもありませんでした。雷鋒に学んで、わたしは、完全に、徹底的に人民に奉

① 雷鋒は中国人民解放軍瀋陽某部隊の運輸中隊の分隊長であった。かれは毛主席の著作の学習に励み、とりわけ「運用する」面で努力をかさねていたので、高度の政治的自覚をもち、プロレタリア階級の立場もしっかりしていて、誠心誠意人民に奉仕する気高い品性をそなえ、三度も手柄を立て、共産主義青年団員の模範として表彰された。かれは一九六〇年十一月に中国共産党に加入した。一九六二年八月、公務中に殉職した。毛主席はみずから「**雷鋒同志に学ぼう**」としたためて、その死を悼んだ。

仕するには、完全に、徹底的に私心雑念をとりのぞかなければならないことを知りました。革命家というものは社会の階級敵とたたかわなければならないだけでなく、自分の思想上の階級敵――私心雑念ともたたかわなければなりませんし、さまざまな非プロレタリア思想を一掃して、毛沢東思想で自分の革命的品性をそだて、毛主席の誠心誠意人民に奉仕せよという教えを自分の魂にしなければなりません。

その後、全中隊では、小整風の方法で、毛主席の階級と階級闘争の論述を学習しました。検査の中で、わたしは、非プロレタリア思想やふるい習慣の力がわたしに影響をおよぼしていないなんて、とんでもないということをいっそう深く知りました。たとえば、「数学、理科、化学を学んでおけば、天下にこわいものなし」といいますが、以前、わたしはこのようなことばには道理があると思っていました。学校で受けた教育の中にも少なからぬ毒素があり、名利観念が思想に焼きついているのです。このことは、社会主義社会にも鋭く、複雑な階級闘争がまだたしかに存在していることを物語っています。わたしたちの世代の目のまえには、二人の教師がいます。プロレタリア階級は正面の教師で、ブルジョア階級は反面の教師です。もし、わたしたちが自覚してプロレタリア思想で自分を武装しないならば、ブルジョア思想がかならず

しのびこんでくるでしょう。

こうした問題をもって、わたしは、毛主席の『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』の中のつぎのことばを学習しました。「**社会主義社会を建設する過程では、だれでもみな改造の必要があり、……労働者階級は仕事のなかでたえず学び、一歩一歩と自分の欠点を克服していくべきで、永遠に停止してはならない。**」毛主席はだれでもみな改造する必要があるといっていますが、その中には、もちろんわれわれのような赤旗の下でそだった青年も含まれているのです。わたしの欠点はなんだろうか。さまざまなことの中から、わたしは、まず、自分は改造する必要はないという「生まれつき赤い」思想を克服しなければならないことに気がつきました。

社会主義の時代の青年は生まれつき赤いはずがあるだろうか。わたしは、自分が以前考えていた赤い思想は一種の素朴な階級感情にすぎなくて、社会主義が個人にもたらした幸福感から生まれたものであり、党、毛主席にたいする感謝の気持ちから生まれたものであることをさとりました。こうした素朴な階級感情はわたしたちに比較的はやく毛沢東思想を受けいれさせます。しかし、こうした素朴な階級感情は、社会主義社会がけっして個人にだけ幸福をもたら

すものではなく、プロレタリア階級と勤労人民全体に幸福をもたらすものなのだ、ということをすでにわかっていたわけではありません。素朴な階級感情をすすんだ階級的自覚にまで高めなければ、ブルジョア思想の侵食を防ぐことはできません。ひとたび多くの人びとの利益のために個人の利益を犠牲にしなければならなくなったとき、試練に耐えることはできないでしょう。素朴な階級感情にけっして満足していてはなりませんし、素朴な階級感情をすすんだ階級的自覚にまで高め、毛沢東思想の自覚にまで高めなければならないのです。そのためには、毛主席の著作を活学活用して、思想を改造することです。「自覚的に赤くする」だけであって、けっして「生まれつき赤い」のではありません。自分はいま青年期にあり、毛主席の著作をまじめに学習し、なんのために生き、だれのために奉仕するのかをはっきりさせて、自覚的に毛沢東思想で武装し、一生涯革命の道を歩むすぐれた基礎をつくらなければなりません。

共産主義の新人を目標に自己を改造する

自覚して自己を改造しなければならないということがはっきりしてから、わたしは、「老三篇」や毛主席のその他の著作を真剣に活学活用し、毛沢東思想を武器にして、思想改造や世界

観を解決する問題に思いきって努力しました。そして、この数年、自分の生きた思想と真正面からとりくみ、いくつかの問題をたえず解決してきました。

一　個人の趣味と革命の必要

わたしは小さいときから絵が好きで、美術専門学校の付属中学を卒業して入隊するとき、画板を背負ってきました。部隊にくると、わたしはわきたつような生活にすっかり引きつけられてしまって、こんどこそいちばん豊かな創作の源をさがしあてた、すこしはものになるものをかいてやろうと思いました。わたしが責任者に連隊史を絵にしたらというと、大いに支持してくれました。ところが、いざ絵にとりかかろうとするときになって、組織は軍事学習のためにわたしを教育大隊に派遣したのです。当時、わたしはどうも納得できないので、学習にいかずにすませられないかと申しでました。連隊の副政治委員は、わたしが納得できないでいるのを見て、自分の歴史を話してくれました。かれは革命に参加する前は旋盤工でした。けれど、旧社会ではいくら技術があっても、貧乏人は飯が食えず、生きていけないので、革命に参加しました。革命に参加してからは、技術工作をやりたかったのですが、当時、革命がもっとも必要

としていたのは銃をとって敵を消滅することだったので、かれは銃をとりました。「われわれ一人ひとりがみな、個人の趣味、個人の特技を強調して、革命の必要に服従しなかったならば、今日の勝利などありえただろうか」と、かれはいいました。そして、「老三篇」をしっかり学習するようにとすすめてくれました。わたしは、学習をして、ベチューン同志は医療技術をもっていたけれど、個人の名誉や地位などすこしも考えず、ひたすら革命の必要に服従し、最後には、中国革命のために自分の命を犠牲にしたのに、自分は絵をかくというちょっとした趣味をどうして自覚的に革命の必要に服従させられないのだろうかと思いました。

納得すると、わたしは気持ちよく教育大隊にいくことができました。だが、しみついた思想というのは一度に克服することはできないもので、たえず飛びだしてくるのです。個人の趣味を完全に革命の必要に服従させるまでには、思想闘争をくりかえしていかなければなりません。同級生のだれだれがすばらしい絵をかいたとか、だれだれが専門技術を学びにいったとか聞くと、思想がぐらつくのです。そのたびに、わたしは『ベチューンを記念する』を学び、毛主席の誠心誠意人民に奉仕せよという教えを学んで、革命の必要で個人の趣味にとってかえました。わが国には、個人の趣味や愛好を十分にのばす天地があります。けれど、これはけっし

て、わたしたちが党の必要からはなれ、人民に奉仕する目的からはなれて、個人の趣味や愛好をのばしてよいということではなく、人民に奉仕するためにさまざまなものを学べということです。もし、革命の必要からはなれて個人の趣味や専門をのばすなら、ブルジョア個人主義者になってしまうでしょう。このことがわかってからは、なにを聞いてもそう動揺しなくなりました。組織がやれといったことはなんでも、わたしは自覚的に服従して、りっぱにやるようにつとめました。それと同時に、絵筆もすてないで自分からすすんで黒板新聞をつくったり、スローガンをかいたり、りっぱな人びとやすばらしい出来事を絵にかいたりしました。わたしはこの中から、革命の必要にこたえてこそ、はじめて個人の趣味は十分にその力を発揮でき、革命に奉仕できるのであって、革命の必要からはなれれば、個人の趣味は個人に奉仕するだけになり、はては敵に奉仕することにさえなるということを学びました。

二　木を植えることと涼をもとめること

以前、わたしは、自分はよいときに生まれて、社会主義にめぐりあわせた、といつも考えていました。ことわざに、「先人木を植え、後人その下で涼をもとめる」というのがありますが、革命の先輩たちがあのように苦しみをなめ、いまの世の中をつくりだしてくれたのも、わたしたち後の世代のものに幸福な生活をおくらせるためなのです。だから、わたしは家にいたとき、継ぎのあたった服など着ませんでした。あるとき、母が父のふるい上衣をつくりなおしてくれたことがありましたが、わたしはいやがって着ようとしませんでした。こんなふうだったので、入隊後の一時期、部隊の生活は、家にいるときほど、居心地がよくはありませんでした。

ある日曜日、わたしは連隊長のところに手紙をとどけにいったことがあります。家の中にはいってみると、連隊長はちょうど靴の修理をしていました。子供のが終わると、自分のも修理し、道具も自家用のものでした。わたしは考えました。こういうふるい責任者たちは、生死のあいだを生きぬいてきて、いまも、戦争当時のような革命精神に燃え、生活も質素で、仕事にも勤勉ですし、いつも中隊にきて戦士といっしょになって教練をやったり、教鞭をとったり、革命の若い世代を育てるために心血をそそいでいるのです。とりわけ、わたしは、継ぎのあたった綿入れのズボンをはいた毛主席の陝西省北部での写真をみて、大きな感動をうけました。こうして、わたしはこれまでの自分の考えがまちがっていたことにだんだんと気づきはじめま

した。革命の先輩たちは、わたしたちと同じ年ごろには、もう革命という荷物を背負い、血を流してたたかっていたのです。かれらは階級の解放、民族の解放という大事を考えていたのです。そして、いまはまた、どのようにして、プロレタリア階級の革命事業をさいごまでやりぬくかを考えているのです。かれらは、いまも、刻苦奮闘の作風をもちつづけています。ところが自分は、個人の楽しみという小事ばかりを考えています。

なぜ、「涼をもとめる」ことだけを考えて「木を植える」ことを考えない思想があるのだろうか。わたしはこういう問題をもって毛主席の著作を学習しました。毛主席はつぎのようにいっています。**「すくなからぬ青年は、政治的経験と社会生活の経験にとぼしいため、ふるい中国とあたらしい中国をよく比較することができず、わが国の人民がいかにかずかずの苦難にみちたたかいをへてはじめて帝国主義と国民党反動派の抑圧からぬけだしたか、また、すばらしい社会主義社会をつくりあげるには、いかに長期の骨身をおしまぬ労働をへなければならないかを深く理解することが容易でない。」**（『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』）毛主席のこの言葉にわたしの思想はとても大きな衝撃を受けました。わたしは、わたしたちの幸福な生活が多くの人びとの鮮血と生命によって得られたものであることを忘れ、わが

国が経済的には貧しく、文化的には立ちおくれた国家であることを忘れ、自分の肩にかかっている責任を忘れていたのです。ここまで考えると、自分には楽しみを口にしたり、闘志をゆるめたりしてよい理由がどこにもないことがわかりました。わたしはさらに突っこんで考えてみました。いったい幸福とはなんだろうか。ちがった階級にはちがった見方があります。プロレタリア階級の幸福観は闘争であり、革命であり、労働であり、人民に奉仕することです。ベチューン、張思徳、雷鋒同志たちはそのもっともりっぱな手本です。自分もかれらのように、誠心誠意人民に奉仕することを最大の楽しみ、最大の幸福にしなければなりません。

その後、わたしは、思い切って自分の私心と戦い、「私」をうち破り、「公」をうち立てるよういつも心がけてきました。あるとき、家に送金しようと思ったのですが、ある同志の家庭は自分よりもお金がいっそう必要らしかったので、その同志にあげました。食事のとき、トウモロコシや粟、米、麦がでると、わたしはトウモロコシや粟をたべました。夜間行軍のとき、いつも先頭に立って道をさぐり、自分は何度ころんでも、みんなによい道をさがしてやろうと思いました。このように思想闘争と実践の鍛練をくりかえしているうちに、思想感情はだんだんと変わっていきました。そして、わたしは、苦しみとはなにか、楽しみとはなにかをほんと

うに知り、プロレタリア階級の幸福観をうち立ててこそ、もっとも幸福な人間になれるのだということがわかりました。ブルジョア個人主義にとりつかれた人間、私心の多い人間は個人の欲望がいつもみたされないので、こういう人間は永遠に幸福になることはできません。わたしたちはいま、たしかに革命の先輩たちが鮮血と生命によってもたらしてくれた幸福な生活をおくっていますし、たしかに「涼をもとめ」ています。けれど、わたしたちは涼をもとめる人間になるだけではだめで、まず木を植える人間にならなければなりません。革命家はいつまでも木を植える人間になって、全世界の人民に社会主義、共産主義の涼をもたらさなければならないのです。

三　祖国をまもることと革命をやること

一九六二年八月、わたしが入隊したとき、蔣介石反動派が大陸反攻をくわだてていました。そのとき、わたしはこの人食い野獣がふたたびわたしたちの頭上にふんぞりかえるのを断じて許してはならないと思いました。わたしは貧農の子で、革命幹部の子ですから、軍隊にはいって祖国をまもり、幸福な生活をまもるのはわたしにあたえられた天職です。部隊にきてから、

わたしは毎日戦争をやることばかり考えて、いつ前線に出発するのかとしょっちゅうたずねました。その後、蔣介石反動派がおじけづいてこないときいたので、わたしは責任者にいいました。「戦争にならないなら、いったん家にもどって、戦争になったらまたでてきます」責任者は聞きました。「きみはなんのために戦士になったんだね」わたしは答えました。「祖国をまもるためです」指導者はまた、「それから」と聞きました。わたしは答えられませんでした。けれど、心の中ではこう思いました。まだほかになにがあるというんだ。革命の先輩たちがつくりだした祖国をわたしたちの世代がりっぱにまもればそれでよいではないか。いったいまだほかにどんな任務があるんだ。すると、責任者はわたしの心の底をみぬいたようにいいました。「世界ではまだ多くの勤労人民が抑圧され、搾取されている。われわれは祖国をまもるだけでなく、世界革命をもたすけなければならない。革命の先輩たちがつくりだした祖国をまもっておくだけではなく、祖国に革命の根拠地としての役割を果たさせなければならない。帝国主義が存在するかぎり戦争はさけられないし、きみたちの世代にいくさをしてもらうときがくる。いくさをするうえでもっとも大切なのは、抑圧され、解放されていない人民や、アメリカ帝国主義と各国反動派のことをかたときもわすれてはならないということだ。ベチューンによ

く学びたまえ」

責任者の話を聞いて、わたしは『ベチューンを記念する』をひらいてみました。毛主席は、「**われわれはすべての資本主義国のプロレタリア階級と団結し、……わが民族と人民を解放し、世界の民族と人民を解放しなければならない**」といっています。また、ベチューン同志のすこしの利己的な動機もなく、中国人民の解放事業を自分自身の事業とした国際主義の精神、共産主義の精神を学ぶように教えています。わたしはこれによって、プロレタリア階級の解放事業がもともと国際的なものなのだということを知りました。だからこそ、ベチューン同志は中国人民の解放事業を自分自身の事業としたのです。

その後、中隊では憶苦（旧社会でなめた階級的な苦しみを思いおこして、階級感情を深めるための集会――訳注）が組織されました。わたしはくりかえし考えました。旧社会の地主や資本家はなぜあのように残酷に労働者や農民を搾取したり、抑圧したりできたのだろうか。毛主席の著作を学習して、わたしははっきりしました。地主や資本家は国民党反動派にまもられ、国民党反動派はアメリカ帝国主義に尻押しされていたからなのです。かつてアメリカ帝国主義は蔣介石反動派をたすけて中国人民を虐殺しましたが、今日はまた、ベトナム人民を虐殺し、各国反動

派をたすけて各国人民を虐殺しています。これはいったいなぜでしょうか。もともとアメリカ帝国主義と各国反動派は地主、資本家の利益をまもっているので、かれらはぐるになって、人民を抑圧し、搾取し、人民が革命をやるのをゆるさないし、解放をかちとるのをゆるさないのです。アメリカ帝国主義は現在の世界人民の災いの大もとです。アメリカ帝国主義が消滅されなければ、世界人民は最後の解放をかちとることはできないし、わたしたちの勝利をうちかためることもできません。わたしたちの世代の任務は中国の社会主義をまもるだけでなく、世界人民の革命をもたすけることです。共産主義を実現するにはどうしても、ベチューンのように国際主義の戦士にならなければなりません。

世界人民のために革命をやるという思想があれば、自分にたいする要求もちがってきましたし、仕事にたいする意気込みもちがってきました。日常生活のなかで、わたしは自分の私心や雑念と思いきってたたかい、食事をしているときでも他人のためを考えているかどうかふりかえってみました。去年、銃剣術の訓練のときのことですが、ある同志が現代の戦争では銃剣術など役に立たないといって訓練をしようとしませんでした。わたしは、同志たちをあつめて毛主席の人民戦争の思想を学習し、同志たちに自信をもたせました。みんなはこういいました。

われわれは「白兵戦で原子爆弾をうちまかし」、いつでも世界人民の革命闘争を支援する準備をしておかなければならない、と。

四　陽光と苗

去年、わたしは『銃剣術の訓練について』と『わが分隊はどのように生きた思想をつかんでいるか』という文章を書きましたが、それが新聞にのると、多くの責任者や同志が手紙をよこしてひじょうに激励してくれました。このとき、わたしが考えたのは、この栄誉にいったい自分がどう対処すればよいだろうかという問題です。わたしの生きた思想はいろいろありましたが、もっとも恐れたのは人からうぬぼれているといわれることで、話していることになにか問題はないだろうか、もし言いちがえでもしたらうぬぼれているといわれるのではないだろうかということでした。しかし、それでは小心翼々とした君子になってしまうではないか、いうべきことはいわなければいけないとも考えました。また、あるときは欠点がさらけだされるのを恐れました。去年の末、ある責任者からわたしたちの第八分隊と第三分隊の銃剣術の訓練を見たいから、わたしにも参加するようにいわれました。当時、わたしは軍に報告にいっていて、

長い間訓練をやっていなかったので、へまをするのを恐れて、やりたくありませんでした。けれど、こういう考えはまちがっていることに気がついて、結局参加することにしたのです。このことがあって、わたしはつぎのように何度も考えてみました。栄誉をうけてから、なぜ「我」が自分をとりまくようになったのだろうか。栄誉をうけてから頭の中に「恐れ」が多くなっているが、その実質は「私心」である。以前、わたしは欠点をさらけだすのを少しも恐れたことがなく、みんなの援助をうけて進歩してきた。いま、欠点をさらけだすのを恐れるのは、面子を考える思想があるからである。このような私心とは思いきりたたかわなければならない。

今年のはじめ、北京の人民大会堂に報告にいったとき、わたしは入場券を本にはさんで持ち帰りました。帰ってくると、多くの同志たちがそれを手にとって見ました。そのとき、ハッとしました。以前、よそへ報告にいったときには、なにも持って帰ったりしなかったのに、こんどはなぜ入場券を持って帰ったのだろうか。自分が人民大会堂に報告にいったことを同志たちに知らせたいからではないだろうか。わたしは、問題の本質はここにあるのだということに気がつきました。そこで、わたしは、入場券の字を印刷してある上半分をそっと切りとり、残りの小さな空白に「私心と白兵戦をやる」と書いて、思想に悪い芽がでてこないように用心しま

した。

わたしはこのことを長いあいだ考えました。そして、自分の学習の成果をどう見るか、党があたえた栄誉をどう見るか、これは、栄誉にりっぱに対処できるかどうかのカギであると思いました。毛主席の著作の学習をはじめたとき、わたしは、問題をもってやることができませんでしたし、いったいどのように用い、どのように総括すればよいのかもわかりませんでした。やはり責任者や同志たちが、問題をみつけてくれましたし、わたしが用い、総括するのをたすけてくれました。学習の成果があがれば励ましてくれましたし、欠点があればすぐにたすけてくれました。わたしの成長は、小さな苗が実り豊かな作物に成長するのに太陽からはなれることができないように、かたときも毛沢東思想からはなれることができないのです。豊作のときには、人びとはいつもすばらしいことだけを口にするものです。わたしの学習が成果をあげると、人びとはすばらしいところだけを見て、いろいろと励ましてくれます。けれど、ほんとうは、わたしが一本の小さな苗にすぎず、作物に成長するには、すべて毛沢東思想にたよらなければならないということをよくわかっています。毛沢東思想はわたしの心の中の永遠に沈まぬ真紅の太陽です。わたしは自分を永遠に、太陽からかたときもはなれることのない苗とみなさ

なければなりません。

その後、問題にぶつかってもいくらか自覚してやるようになりました。たとえば、あるとき、わたしは外出からおそくもどって、食堂に食事にいったことがあります。残っているものを食べるのがあたりまえなのですから、炊事員がわざわざ別につくろうとしたのを、かたくことわって、残りものを食べました。わたしはネギが好きで、食事のとき炊事員がもってきてくれることがありますが、それもけっして食べません。わたしに別の料理をつくってくれたり、ネギを食べさせてくれたのは、かれらがわたしのことを気にかけてくれているからなのですが、自分としては絶対にそれを受けるわけにはいきません。受ければ、自分が特殊で、大衆とちがってもいいということを認めることになってしまいます。また、思想が進歩したある同志はよくこういいました。自分が進歩したのは、王道明がたすけてくれたおかげだ、と。わたしはこれを聞いて、自分は仕事の中で自分個人を目立たせるようなことがあったのではないかときびしく検討しました。また、わたしは中核の同志を集めて、これらの同志たちと話しあい、これらの同志たちが、わたしに報告するだけでなく、党細胞やその他の党員の同志たちにも報告するようにさせましたし、仕事をするときは、けっして個人を目立たせたり、自分の手

柄にしたりすることのないようにしました。

毛主席はこういっています。「**たとえわれわれの仕事がひじょうに大きな成績をあげたとしても、うぬぼれたり、思いあがったりしてよい理由はどこにもない。謙虚は人を進歩させ、うぬぼれは人を落後させる。われわれはいつまでもこの真理を、心にきざみこんでおかなければならない。**」（『中国共産党第八回全国代表大会の開会の辞』）　またこうもいっています。「**すこしばかりよい事をするのはさして難しいことではない。難しいのは一生涯悪い事をせず、よい事をすることである。**」（『呉玉章同志の還暦にたいする祝いのことば』）このように、毛主席は数十年一日のように刻苦奮闘せよとわたしたちに教えています。わたしはいま、毛主席の著作を学習してすこしばかり成績をあげはしましたが、この成績にいい気になって一生をすごすことは絶対にできません。革命の道のりはまだまだ長く、一生の道のりはまだまだ長いのです。生きているかぎり、革命をやり、改造をやり、毛主席の著作を活学活用しなければなりません。毛沢東思想にたより、一生涯革命の道を歩まなければなりません。成果や栄誉は、ブルジョア個人主義思想の持ち主にとっては、金文字の看板ですし、個人の地位や享楽を得る資本ですし、進歩の終点です。プロレタリア戦士はけっして成績や栄誉のうえにあぐらをかくことはできません。プロレタリア戦士にとって、成績や栄誉は、はげましといましめですし、党のためにいっそう大きな成果をつくりだす出発点ですし、自分に新しい任務をあたえ、自分の思想の革命化にいっそう高い要求を出すものですし、進歩の起点なのです。

毛沢東思想で私心や雑念と「白兵戦」をする

わたしは、毛主席の著作をしっかり学び、りっぱに用い、毛沢東思想を自分の頭の中にしっかりと植えつけるためには、毛沢東思想を用いて自分の頭の中のブルジョア思想とたたかうことがもっとも大切だということを知りました。闘争の中で学び、闘争の中で用い、闘争の中で改造し、闘争の中で成長しなければなりません。たえず闘争してこそ、はじめて毛主席の著作にたいする認識をたえず高め、毛主席の著作にたいする感情をたえず深め、自分の体得を得ることができるのです。そうでなければ、おいしい味をあじわうこともできませんし、学習の成果をうちかためるのも容易ではありません。以前、わたしたちの第八分隊は、私心との闘争を「毛沢東思想で私心や雑念と白兵戦をする」という一句にまとめました。つぎにわたしの体得をいくつか話してみましょう。

（一）毛主席のことば、とくに多くの基本的観点と名言は暗記しなければなりません。暗記していれば問題にぶつかったとき、思いだすことができます。学習をはじめたばかりのころは、問題にぶつかっても語録の一節をさがしだせなかったり、さがしまちがえたりして、ある問題はうまく処理できませんでした。その後、いつも学び、いつも用い、いつもおぼえたので、しばらくするとすっかり暗記してしまいました。暗記するというのは、頭の中にしまっておくということではありません。行動にあらわすということなのです。暗記していれば、いつでも学び、いつでも用いることができて、思想と行動がいっそう自覚的になるのです。

（二）自分の「塑像」をつくっておいて、思想改造の手本を自分にえらんでやらなければなりません。つまり、自分をどのような人間に改造し、きたえあげていくかという、自分の将来の形象を頭の中にはっきりつくっておくことです。わたしの頭の中の形象は「老三篇」を学習してからできたもので、その後、雷鋒に学んで、「公」と「私」に正しく対処する形象がくわわり、陳金元の報告を聞いて、同志が一生涯革命をやりぬくように責任をもつという形象がくわわりました。英雄や先進的な人びとに学ぶたびに自分の思想改造の目標がふえていきました。中隊にも「形象」があります。たとえば、中隊長の、仕事にたいする責任感とものごとを

深く探究する精神、指導員の原則性と闘争性、また、誤解されても積極的に仕事をする同志などです。実際には、だれの頭の中にもかならず「形象」があり、だれでもかならず他の人びとに学び、それを手本にしているのです。わたしたちは自覚して、革命的な人びと、毛沢東思想で武装した人びとの形象に学び、かれらを手本にして、すべてのよくない形象とたたかい、それらを一掃し、自分の頭の中に共産主義の戦士の形象をしっかりとつくりあげなければなりません。

（三）頭にひらめいたものをうまくつかまえなければなりません。見たり、聞いたり、かいたりすれば、かならず頭の中にあれこれの考えが生じます。ふだん、しょっちゅう生まれてくるこうした考えをうまくつかまえて、それが正しいかどうか、毛沢東思想にあっているかどうかを見なければなりません。自己の生きた思想をつかまえてこそ、はじめて問題をもって学べるのです。こんなことがありました。今年のことですが、わたしは他の同志とある単位で報告をおこないました。報告が終わってから、そこの毛主席の著作の学習積極分子と座談会をもちましたが、最初のうちはみんながほめてくれたので、わたしも悪い気がしませんでした。ところが、わたしたちをつれていった同志がみんなに意見を求めて、批判してくれるようにといったとき、自分がなにかいわれるんじゃないかと、胸がドキドキして、頭をあげられなくなって

しまいました。けれど、わたしはすぐに、これがひじょうによくないことなんだと気づいて、座談会の席上で、自分からすすんで検討しました。

（四）毎晩、「思想のフィルム」を現像してみること。人間の耳、目、鼻などの器官は写真機のシャッターのようなものです。これらの器官が見たり、聞いたり、かいだりした外界の客観的事物は、かならず頭の中に印象として残るものです。わたしは毎晩ベッドに横になってから、「思想のネガ」になにがうつったかを調べてみます。よいものはそのままのこしておき、悪いものはとりのぞきます。毛主席のことばで「定着」して、水洗いするのです。自分ではっきりしないものは、人にたのんで「引伸し」てもらいます。もし、自覚してこのようにやらないと、よくない思想がしらずしらずのうちにはびこっていくのです。

（五）肝心なところをつかむこと。今年のはじめ、わたしは出張から帰って指導員のところへ思想状況を報告しにいったのですが、報告が終わったときにはもう十時をすぎていました。指導員はわたしに中隊本部にとまっていくようにといって、もうちゃんとふとんもしかれていました。わたしは、自分は小隊長だけれど、ここしばらく小隊にいなかったのだから、ひと晩くらい中隊本部にとまったって別に悪い影響なんかないだろうと思いかけたのです。しかし、

もう一度考えてみると、これは自分をあまやかす態度であって、こういうことに慣れたら、自分を特殊化して、大衆からひきはなすという欠陥を生みだすだけで、どんなよいこともありません。悪い影響なんかないといって自分をあまやかしてはいけませんし、思想上、きびしく自分に要求しなければいけません。思想の革命化のためにならないことは一回だってやってはならないのです。そこで、わたしは小隊にもどりました。悪い思想、誤った思想は、しばしば最初によくない事をやったことから生まれるものですから、第一の関門をしっかりとじて、悪い思想、誤った思想が最初のことを突破口にして自分の頭に侵入してくるのをふせがなければならない、ということをわたしは知りました。自分をあまやかしたときは、思想の革命化の要求を弱めたときですし、思想が坂道をころがり落ちるときなのです。どんな口実をもってしても自分の誤った思想と妥協してはなりません。

よい思想、よい作風もやはり長い時間をかけてつくられ、年月をかけて少しずつそだてられていくものです。最初にぶつかったよいことをかならずやるようにしなくてはいけませんし、それかといって、それだけでいつまでも満足していてはいけません。よい思想、よい作風はすぐにつくられるものではなくて、思想の火花の「積みかさね」であって、思想の火花が「積み

かさね」られると飛躍が生まれ、思想も質的に変化するのです。

（六）革命的な「ねばり強さ」をもつこと。革命をやり、自分を改造して共産主義の新しい人間にきたえあげるには、強固な革命的決意と強固な革命的気迫がなければだめです。わたしはいくらかねばり強さがあるので、よくない考えであればそれは考えないようにし、よくないことであればそれはやらないようにし、毛沢東思想で自分の私心や雑念と思いきりたたかい、よいことをやるよう自分に「強制」します。こういうときには、毛主席の教え、英雄や模範的な人びと、自分の将来の「形象」をよく考えてみます。わたしはこういうねばり強さはよいことだと思います。毛主席は、**「われわれ中華民族は、自分たちの敵と最後まで血戦をする気概をもち、自力更生を基礎として失われたものを回復する決意をもち、世界の諸民族のあいだに自立する能力をもっている」**（『日本帝国主義に反対する戦術について』）といっています。わたしたちは、毛主席の教えているこうした革命的気迫、決意、能力をもって、自分の思想の「敵」とさいごまでたたかい、自分を強固な共産主義の戦士にきたえあげなければなりません。

（一九六六年十月二十五日づけ『人民日報』より）

毛沢東思想は百戦百勝の武器

1969年　初版発行　　**定価 60 円**

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. Box 399）

編号：（日）3050—1806　　3—J—808Pc
00030

既刊図書案内

★毛沢東著作★

毛沢東選集（第一巻）　三〇〇円

本巻には、第一次国内革命戦争の時期（一九二四～一九二七年）と第二次国内革命戦争の時期（一九二七～一九三七年）における、毛沢東同志の十七編の著作がおさめられている。

毛沢東選集（第二巻）　三〇〇円

本巻には、抗日戦争が勃発した一九三七年七月から、蔣介石が発動した二回目の反共の高まりを撃退した一九四一年五月までの時期における、毛沢東同志の四十編の著作がおさめられている。

出版者 北京 外文出版社　　発行者 中国国際書店（北京）

毛沢東選集（第三巻）　三〇〇円

本巻には、一九四一年三月から一九四五年八月までの抗日戦争が最後の勝利をおさめた時期における、毛沢東同志の三十一編の著作がおさめられている。

毛沢東選集（第四巻）　三〇〇円

本巻には、一九四五年八月から一九四九年九月までの時期における、毛沢東同志の七十編の著作がおさめられている。

毛主席語録　赤色ビニール表紙　一五〇円

毛主席語録（縮刷版）　赤色ビニール表紙　一五〇円

毛沢東主席の人民戦争についての語録　赤色ビニール表紙　二〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

中国社会各階級の分析　三〇円

湖南省農民運動の視察報告　六〇円

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか　三〇円

党内のあやまった思想の是正について　四〇円

小さな火花も広野を焼きつくす　四〇円

大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ　二〇円

日本帝国主義に反対する戦術について　四〇円

中国革命戦争の戦略問題　一〇〇円

抗日の時期における中国共産党の任務　四〇円

何百何千万の大衆を抗日民族統一戦線へ参加させるためにたたかおう　二〇円

実践論　四〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

矛盾論　六〇円
抗日遊撃戦争の戦略問題　六〇円
持久戦について　一〇〇円
民族戦争における中国共産党の地位　四〇円
統一戦線における独立自主の問題　二〇円
戦争と戦略の問題　四〇円
青年運動の方向　三〇円
『共産党人』発刊のことば　四〇円
中国革命と中国共産党　六〇円
新民主主義論　六〇円
新民主主義の憲政　二〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

当面の抗日統一戦線における戦術の問題　二〇円
政策について　二〇円
『農村調査』のはしがきとあとがき　二〇円
われわれの学習を改革しよう　二〇円
党の作風を整えよう　三〇円
党八股に反対しよう　三〇円
延安の文学・芸術座談会における講話　五〇円
第二次世界大戦の転換点　二〇円
指導方法のいくつかの問題について　二〇円
組織せよ　二〇円
学習と時局　三〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

連合政府について　一〇〇円

毛沢東同志は論じている――
帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である　四〇円

アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話　三〇円

中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告　四〇円

全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と
そのすべての手先をうち破ろう　三〇円
――アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人民、コンゴ（レ）人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話

書物主義に反対する　三〇円

敵に反対されるのは悪いことでなく、よいことである　三〇円

農業協同化の問題について　四〇円

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について　六〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

中国共産党全国宣伝工作会議における講話　四〇円

人間の正しい思想はどこからくるのか　二〇円

文学・芸術に関する五つの文献　二〇円

中国共産党中央委員会主席毛沢東同志の、
アメリカ黒人の抗暴闘争を支持する声明　一〇円

「中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか」
「井岡山の闘争」「党内のあやまった思想の是正について」「小さな火花も広野を焼きつくす」　六〇円

哲学論文四編　一〇〇円

毛主席の五篇の著作　赤色ビニール表紙　四〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

★重要決定、理論論文★

人民戦争の勝利万歳
——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して　林彪　四〇円

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線
統一戦線の路線と政策を正しく実行する
農民に依拠し、農村根拠地を樹立する
新しい型の人民の軍隊を建設する
人民戦争の戦略・戦術を実行する
自力更生の方針を堅持する
毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義
人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ
フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定　三〇円
中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報　三〇円
中国共産党第八期中央委員会第十二回総会の公報　二〇円
画期的な文献　三〇円
各国の革命的人民の勝利への針路　二〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

近刊予告

★毛沢東著作★

井岡山の闘争

抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針

重慶交渉について

当面の情勢とわれわれの任務

山西・綏遠解放区幹部会議での演説

党委員会制度の健全化について

革命を最後まで遂行せよ

人民民主主義独裁について

白書を評す

出版者 北京 外文出版社　　発行者 中国国際書店（北京）

7/00